

音楽界展望

令和7年（2025年）1月～12月

統括的展望	2
オーケストラ	5
ピアノ	7
器楽、室内楽	9
オペラ	11
声楽	13
合唱	15
吹奏楽	17
作曲	19
評論	21
音楽映像メディア（CD&DVD）	23
各地の音楽活動	
北海道	25
東北	27
北陸	29
中部	30
関西	32
中国	34
四国	37
九州	39

統括的展望

寺西 基之

盛況ぶりとその裏の様々な問題

2025年の音楽界はかなりの盛況ぶりを呈したといっていよい。少なくとも東京では夥しい数の演奏会が開かれ、多数の外国の演奏家や名門団体の来日公演が行なわれるなど、コロナで演奏会の中止が相次いだ時期がもはや遠い時代のことのように思えるほどの活況ぶりがみられた。その一方で物価高や円安をはじめとする経済の状況は演奏会やイベントの開催に大きな影響を与え、チケット価格の高騰を引き起こしており、また不穏な国際情勢も影を落としているなど、一見の盛況の裏には様々な問題も存在している。

それを象徴しているのがウィーン国立歌劇場の引越し公演だった。コロナ禍で途絶えていたこの名門歌劇場の来日が9年ぶりに実現することで大きな話題となったが、それ以上に目を引いたのはチケットの値段である。S席が平日で79,000円、土日は82,000円、最低のE席でも平日26,000円、土日29,000円という空前の高値となり、当然ながらこれで果たして買う人がいるのかという声が当初は多かった。しかし蓋を開けてみれば《フィガロの結婚》《ばらの騎士》の2演目併せて計9公演がすべて完売といった盛況裡に終わったのである。

ウィーン国立歌劇場だけではなく、7月に河口湖のステラシアター（野外音楽堂）で開催されたグスターボ・ドゥダメル指揮によるベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の「ヴァルトビューネ河口湖」の公演はなんとVIP席が100,000円、アリーナ席50,000円、S席45,000円で完売したし、11月にはクリスティアン・ティーレマン指揮のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団、キリル・ペトレンコ指揮のベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、クラウス・マケラ指揮のロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団という世界の3大名門オーケストラが重なるよう到来日、いずれもがチケットは高額だったが（S席ではウィーン・フィルが47,000円、ベルリン・フィルが50,000円、コンセルトヘボウ管が38,000円）、やはり結果はほぼ売り切れたという。たしかに今の円安では海外まで聴きに行くよりも日本で聴くほうが安いと考えることはできるし、コロナ後の反動需要、海外の名門だけに興味のある層やよいものを聴くのにはお金に糸目をつけないマニアの存在など、この完売現象には様々な背景がある。円安や航空運賃・ホテル代などの高騰ではこの値段を付けざるを得ないという主催者側の言い分も理解できるし、

またそれだけの購買力を持つ層があることが今回明らかになったともいえる。ただ今後もこうした状況が続いてチケットが売れるかはわからないし、ウィーン国立歌劇場を観るためにそれまで続けてきた日本のオーケストラの定期会員をやめた人がいるというような話を聞くと、果たして音楽界全体が活気づいているのかどうかは疑問と言わざるを得ない。

もっとも名門以外の演奏会もそれなりの活況をみせ、オーケストラやリサイタルでも外来か日本人演奏家かを問わずチケットがよく売れる公演がいくつもあった。ただそれが人気アーティストの出演する公演や話題性のある演奏会に偏りがちであったこともたしかである。特定の若手の人気ピアニストたち、国際的な大コンクールの優勝者・入賞者など必ず集客が見込めるアーティストを起用することはここ2、3年目立ってきていたが、その風潮がさらに強まった感があり、その分内容は良くて地味な演奏会は集客にますます苦勞するようになるという傾向があったようだ。もちろん主催者側としては売れる公演を作ることは必要だし、最近の人気アーティストのほとんどは実力も兼ね備えているので演奏会自体は充実したものとなることが多いが、ネームバリューに頼らざるを得ない風潮が強まっているのは健全ではないだろう。

相次いだ海外オーケストラの来日

もちろん演奏の質はそうした問題とは別な話で、内外の団体・アーティストともに注目すべき優れた公演が多かった。来日オーケストラでは上記の3大名門がそれぞれの美質を存分に発揮、ウィーン・フィルのブルックナーの交響曲第5番はこのオケ独自の艶やかな音色がティーレマンの壮大で剛毅な造型と溶け合い、コンセルトヘボウ管のマーラーの交響曲第5番は楽団の伝統である芳醇でまろやかな質感を持った響きに若きマケラの先鋭なアプローチが結び付いた名演に結実した。特に注目したいのは前述のようにベルリン・フィルが7月と11月の2度にわたって来日したことだ。これほどの名門が年に2回も日本に来るのは稀なことで、7月にはドゥダメルの指揮による野外コンサート「ヴァルトビューネ河口湖」で華麗なノリのよい演奏を聴かせ、11月は首席指揮者・芸術監督のペトレンコの指揮でこの楽団の持ち味である重厚さ（ブラームスの交響曲第1番）とヴィル

トゥオーゾ性（バルトークの《中国の不思議な役人》およびストラヴィンスキーの《ペトルーシュカ》）を發揮するということに、表現力の幅広さを披露して楽団の底力を見せつけた。

他にも夥しい数のオーケストラが日本にやってきた。山田和樹はバーミンガム市交響楽団を率いてムソルグスキーの《展覧会の絵》をヘンリー・ウッドの編曲で取り上げ、マケラはベルリオーズの《幻想交響曲》でパリ管弦楽団から鮮烈な色彩を引き出したほか、フィルハーモニア管弦楽団、ベルリン放送交響楽団、バンベルク交響楽団、トーン・キュンストラ管弦楽団、ロッテルダム・フィルハーモニー管弦楽団、スイス・ロマンド管弦楽団、ワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団、ミラノ・スカラ座フィルハーモニー管弦楽団、ポーランド国立放送交響楽団、バイエルン国立管弦楽団、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団、ロサンゼルス・フィルハーモニックほか日本を訪れている。室内管弦楽団としてはアンドラーシュ・シフが率いるカペラ・アンドレア・バルカが解散前の最後の来日を果たし、味わいある名演で有終の美を飾った。古楽オーケストラではルネ・ヤコプス指揮ビー・ロック・オーケストラがヘンデルのオラトリオ《時と悟りの勝利》で鮮烈な印象を残している。

日本のオーケストラの活動

日本のオーケストラの公演も注目すべきものが多かった。NHK交響楽団はヘルベルト・ブロムシュテットやシャルル・デュトワといった長老指揮者が円熟の至芸を披露する一方で、弱冠25歳の新鋭タルモ・ペルトコスキが研ぎ澄まされた精妙な演奏で類い稀な才腕を發揮している。東京都交響楽団は下野竜也の指揮で東京文化会館大ホールの客席を含む空間を生かしてミュライユ、夏田昌和、黛敏郎の作品の壮大な音響世界を具現化、大阪フィルハーモニー交響楽団は音楽監督の尾高忠明のタクトのもとでエルガーの大作《ゲロンティアスの夢》を壮大に歌い上げ、東京交響楽団はジョナサン・ノットが音楽監督最終年の集大成としてブリテンの《戦争レクイエム》などで名演を聴かせた。大阪の4つの楽団がいずれもホールの主催・企画により山田和樹の指揮でメンデルスゾーンの交響曲全5曲を取り上げたのも注目される。

楽団の主催による演奏会形式もしくはセミ・ステージ形式のオペラが多かったのも特筆すべきで、セバステアン・ヴァイグレ指揮読売日本交響楽団による《ヴォツェック》、柴田真郁指揮大阪交響楽団の《運命の力》、阪哲朗指揮山形交響楽団の《トスカ》、高関健指揮東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団の《ドン・カルロ》、沼尻竜典指揮神奈川フィルハーモニー管弦楽団の《ラインの黄金》、トレヴァー・ピノック指揮紀尾井ホール室内管弦楽団および山下一史指揮愛知室内オーケストラによる《コジ・ファン・トゥッテ》

など、いずれも意欲的な姿勢が窺える内容だった。また東京・春・音楽祭の主催ではマレク・ヤノフスキ指揮N響の《パルジファル》、ノット指揮東響の《こうもり》、オクサーナ・リーニフ指揮読響の《蝶々夫人》という3つのオペラが演奏会形式で上演されたほか、秋のリッカルド・ムーティによる「イタリア・オペラ・アカデミー in 東京」では《シモン・ボッカネグラ》が取り上げられ、イタリア・オペラの真髄を日本に伝えたいというムーティの意気込みが入念なりハーサル（これは連日公開された）と本番をとおして見事に結実した。

オペラの注目公演

舞台上演によるオペラとしては、新国立劇場では大野和士が細川俊夫の新作《ナターシャ》を世界初演して話題を呼んだほか、リチャード・ジョーンズ演出の新制作《ヴォツェック》を指揮して芸術監督としての存在感を示している。上岡敏之の指揮による東京二期会の《さまよえるオランダ人》は深作健太の斬新な演出が光り、びわ湖ホールでは芸術監督の阪哲朗が《死の都》を故・栗山昌良の演出で取り上げて美しい世界を作り出した。セイジ・オザワ松本フェスティバルは沖澤のどか指揮、ロラン・ペリー演出でブリテンの《夏の夜の夢》を上演、幻想的な舞台が繰り広げられ、小澤征爾亡き後もこの音楽祭が彼の精神を継承していることをアピールしている。古楽オペラも濱田芳通率いるアントネッロのモンテヴェルディの《オルフェオ》が高く評価され、またヘンデルの《ロデリンダ》を調布国際音楽祭（鈴木優人指揮パッハ・コレギウム・ジャパン）と北とびあ国際音楽祭（寺神戸亮指揮レ・ポレアーダ）の2つの音楽祭が取り上げたことも興味深い。近藤謙の《羽衣》の日本初演（サントリーホール主催）が実現したことも特筆されよう。

日本人アーティストの活躍

リサイタルや室内楽は大物から新進まで数えきれないほどの演奏会が開催され、ここで個別に取り上げる余裕はないが、日本人アーティストの活躍には一部触れておこう。長老では数えで90歳を迎える左手のピアニスト館野泉が「卒寿記念コンサート」を開催して健在ぶりを示し、腕の故障から復帰した81歳の前橋汀子はベートーヴェンのヴァイオリンソナタ・ツィクルスで今なお進化を続けていることを明らかにした。原田幸一郎は弟子たちを集めた「80歳記念コンサート」で室内楽と指揮で円熟の演奏を披露している。デビュー40周年を迎えたピアノの小山実稚恵をはじめとするベテラン世代の活躍も目立った。その下の世代では、大胆なアプローチで様々な表現の可能性を追求しているヴァイオリンの佐藤俊介、新たなレパートリーを次々と開拓しているピアノの阪田知樹など、従来の枠に捉われることなく意欲的な活動を展開しているアーティストが多いのは

頼もしいかぎりだ。前述の細川俊夫の《ナターシャ》の主役に抜擢された新進メゾ・ソプラノの山下裕賀をはじめとして声楽のジャンルでも優れた逸材が出てきている。若手の弦楽四重奏団の筆頭に挙げられるクアルテット・インテグラの活躍もめざましい。

国際コンクールでの日本人の成績も目を見張るものがあり、エリザベート国際王妃コンクールでは第2位に久末航、第5位に亀井聖矢が入賞、ショパン国際コンクールでは第4位に桑原志織が入賞、進藤実優が入選、シベリウス国際ヴァイオリンコンクールではMINAMI（吉田南）が第2位を受賞した。米田覚士はブザンソン国際指揮者コンクールで優勝という快挙を成し遂げている。

音楽祭の話題

各地の主だった音楽祭も例年通り開催されたが、特記したいのは新しく青森でスタートした「青い海と森の音楽祭」である。ともに青森出身の指揮者の沖澤のどかとソプラノ歌手の隠岐彩夏が青森県の音楽振興を図るべく創設したもので、一流演奏家たちに声をかけ、県内各地へのアウトリーチ活動とともに演奏会を開催して、県民の多くにクラシックに触れてもらうことを意図している。最終日の祝祭オーケストラ公演は2,000人収容のホールが満席となり、スタンディングオベーションが起こる盛況ぶりだった。今後の発展がおおいに期待できそうだ。また宮崎国際音楽祭は音楽監督がこれまでの徳永二男から三浦文彰に代わったのに伴って出演メンバーも一新され、とりわけチョン・ミョンフン指揮の音楽祭管弦楽団の演奏会は大きな盛り上がりを見せた。

衰退業界？

このように賑わいをみせた2025年の音楽界だったが、実際は厳しい状況が続いていることには変わりはない。新日本フィルハーモニー交響楽団は事務局の求人サイトで「衰退業界へようこそ」と呼びかけて大きな論議を巻き起こした。その是非はともかく、業界は生き残りをかけて様々な努力をし、衰退の道を辿らないようにいろいろな可能性を探ってきた。だからこそコロナ禍の最も厳しい時期も乗り越え、優れた意欲的な企画が相次ぐ今の状況に繋がっているわけで、その底力が今後も発揮されることを信じたい。

大阪・関西万博に期待する向きも当初はあったが、ことクラシック音楽に関する限り目立った企画はほとんどなかった（ドゥダメル指揮ベルリン・フィルの大阪公演も単に後援しただけで、万博主催ではない）。1970年の大阪万博は外国の大物アーティストや楽団を招聘したり日本の前衛音楽を特集する催しを行ったりして音楽界の起爆剤となったものだが、今や時代は異なり、万博の意義も万博に人々が求めているものも違ってきているので、万博に期待するほうがもともと無理というべきかもしれない。ただそれに

してもせっかくの機会に日本のクラシック音楽の発展を促す企画や日本の音楽水準を世界に披露するような企画が少しはあってもよかったのではないか。お隣の中国や韓国では音楽を含む文化を国力とみなしてその発展に力を入れており、クラシック文化でも今や日本を追い越そうという勢いがある。文化は国力であるという認識を日本の政治家はもっと持つべきだろう。

追悼

2025年も音楽界に長年多大な貢献をしてきた偉大な音楽家たちがあの世に旅立った。特にまだまだ現役を続けられたはずの秋山和慶が不慮の大怪我で入院中に肺炎で死去（享年84）したことは日本の音楽界にとってきわめて大きな損失だったといえるだろう。山形交響楽団の創立指揮者で地方の音楽界の発展に生涯身を捧げた村川千秋（享年92）、リンツ・ブルックナー管弦楽団や読響のコンサートマスターを歴任し、近年はソリストとして我が道を行く活動を展開していた小林武史（享年94）、吹奏楽やアマチュア・オケの指揮に力を注いだ汐澤安彦（享年86）、京都にフランス音楽アカデミーを設立し、長岡京アンサンブルを組織するなど、演奏と教育の両面で多大な功績を残したヴァイオリニストの森悠子（享年80）、フランス音楽の第一人者で、アンサンブル奏者としても優れたセンスを発揮したピアニスト・作曲家の藤井一興（享年70）も世を去った。大阪フィルや札幌交響楽団や日本演奏連盟の事務局長を歴任し、晩年は富士山静岡交響楽団専務理事として活動するなど、日本のオーケストラ界・演奏界の発展に寄与し、各地の音楽祭など地方の音楽振興にも深く関わった宮澤敏夫の死去（享年81）も惜しみてあまりある。

寺西基之（てらにし・もとゆき）

上智大学文学部卒、成城大学大学院修士課程修了（西洋音楽史専攻）。音楽評論家として執筆活動を行う一方、(公財)東京交響楽団監事、(公財)東京二期会評議員、(公財)アフィニス文化財団理事、(公財)東京オペラシティ文化財団理事、(公財)日本ピアノ教育連盟評議員、(公財)日本交響楽振興財団評議員、日本製鉄音楽賞選考委員などを務める。共訳書に『グラウト／パリスカ 新西洋音楽史』、共著に『ピアノの世界』ほか。

オーケストラ

柴辻純子

コロナ禍も落ち着き、オーケストラ団体の活動も活発になってきた。その一方で世界に目を向ければ、ロシアのウクライナ侵攻はいまだ終結に至らず、世界情勢の不安定化や記録的な円安など、オーケストラの運営に影響を与える要素も少なくない。そうしたなか、NHK交響楽団（5月）と、東京フィルハーモニー交響楽団（10～11月）が欧州ツアーを行った。N響は首席指揮者ファビオ・ルイーゾと5か国6都市を巡り、アムステルダムではベルリン・フィルやロイヤル・コンセルトヘボウ管などととも、「マーラー・フェスティバル2025」に参加、交響曲第3番と第4番を演奏した。東京フィルは、名誉音楽監督チョン・ミョンフンと7か国8都市で公演を行い、トゥールーズではアル・オ・グラン劇場の「偉大なる演奏家シリーズ」40周年記念のオープニングとして招かれた。両楽団とも欧州各都市で音楽的な成果を上げたが、一方で日本の楽団の認知度はいまだ十分とは言えない。国際的な存在感を高めるためにも、日本のオーケストラ界全体の発展においても、日本の楽団の継続的な海外公演は必要であると感じた。

さて、国内主要楽団の活動について、N響は、ヘルベルト・ブロムシュテットが10月定期に登場、3プロ6公演を指揮した。ストラヴィンスキー「詩篇交響曲」とメンデルスゾーンの交響曲第2番「讃歌」のAプロは、スウェーデン合唱団の清らかな合唱とともに神に捧げられた祈りの崇高さは感動的だった。また、8年ぶりにシャルル・デュトワが定期を指揮。ラヴェルやメシアン作品での緻密に作られた繊細な響きと色彩感が絶妙だった（11月）。そのほか、トゥガン・ソフィエフ渾身のショスタコーヴィチ交響曲第7番（1月）、フィンランドの25歳、タルモ・ペルトコスキは、新鮮な驚きもたらした（6月）。

読売日本交響楽団は2月、常任指揮者セバスティアン・ヴァイグレが、2025年が記念年のアルバン・ベルクの歌劇『ヴォツェック』を演奏会形式で取り上げた。オペラ指揮者として欧州で評価の高いヴァイグレは、整然かつ複雑に作られたベルクの音楽を解像度の高い演奏で聴かせた。首席客演指揮者ユライ・ヴァルチュハ（8月）、初共演のケント・ナガノ（9月）との独自のアプローチによるマーラーの交響曲第7番「夜の歌」をはじめ、多彩な指揮者陣と高水準の演奏で話題を集めた。東京都交響楽団も、音楽監督の大野和士と、大野がオペラ芸術監督を務める新国立劇場のオペラ

ピットに入って『ヴォツェック』を演奏。リチャード・ジョーンズの演出と相まって色彩感のある音楽を作り上げた（11月）。また、年末にはフィンランドの中堅ペッカ・クーシストが2026年4月からアーティスト・イン・レジデンス、28年から首席指揮者就任予定と発表され、新たな時代を次世代に託す楽団の決断は注目された。

楽団シェフの交代と言えば、2014年から務めた東京交響楽団音楽監督ジョナサン・ノットが最終年を迎えた。ノットは、20世紀や同時代の音楽を巧みに組み合わせた魅力的なプログラミングで多彩な活動を展開し、コロナ禍での対応など楽団と特別な関係を築いた。とりわけ7月のブリテン「戦争レクイエム」の緊迫感と透明感、その歌詞は戦争が現実となったいま、より痛切に感じられた。最後の定期は、就任披露演奏会と同じ武満徹「セレモニアル」とマーラーの交響曲第9番で締め括った（11月）。

欧州ツアーを成功させた東京フィルは、チョン・ミョンフン、ミハイル・プレトニョフ、アンドレア・パッティストーニがそれぞれ個性を打ち出したプログラムで魅了した。どの演奏でも弦楽器のアンサンブルの精度が高く、管楽器の充実も特筆される。日本フィルハーモニー交響楽団は、2023年から首席指揮者を務めるカーチュン・ウォンと関係を深める。没後50年のショスタコーヴィチの交響曲第11番では大編成のオーケストラを手堅くまとめ、意欲と情熱に溢れる演奏で聴衆に訴えた（10月）。また、長年継続する九州公演は、芸術性と社会性の両輪での活動への評価から佐川吉男音楽奨励賞受賞した。

新日本フィルハーモニー交響楽団の佐渡裕音楽監督は、「ウィーン・ライン」としてウィーンにゆかりの作曲家を軸に選曲する。1月のマーラーの交響曲第9番の豊かな情感と引き締まった躍動は、3シーズン目となる指揮者と楽団の充実した関係を示していた。5月に登場の86歳ハインツ・ホリガーの鋭敏な感覚は、指揮とオーボエの両方で発揮され、卓越したテクニックと見事な構成力に驚かされた。創立50周年の東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団は、高関健常任指揮者とともに、ヴェルディの歌劇「ドン・カルロ」（演奏会形式、9月）、メシアン「トゥーランガリラ交響曲」（11月）と大作に挑み、存在感を示した。

神奈川フィルハーモニー管弦楽団は、沼尻竜典音楽監督が4年目に入った。楽員たちと結束を固め、定期はもとより、

斬新な組み合わせで企画力の高い音楽堂シリーズや、音楽監督が得意とするオペラへの取り組みとなる6月のワーグナーの楽劇「ラインの黄金」(演奏会形式)も注目された。群馬交響楽団は、創立80周年を迎え、飯森範親常任指揮者とマーラーの交響曲第8番「千人の交響曲」で祝った(11月)。毎回の定期に邦人作品を入れるなど、地方から熱い発信を続けた。

各地のオーケストラについては簡単に触れておきたい。札幌交響楽団は、エリアス・グランディが首席指揮者に就任し、「マーラー・プロジェクト」と「リヒャルト・コレクション」を始動させた。山形交響楽団は、常任指揮者の阪哲朗と手堅い活動を続け、恒例の東京・大阪公演(6月)、3年目の演奏会形式オペラシリーズ(2月)も定着してきた。仙台フィルハーモニー管弦楽団は、常任指揮者高関健・指揮者太田弦体制3年目。生誕100周年の芥川也寸志の未出版作品、弦楽のための「陰画」やバルトークのヴァイオリン協奏曲第2番(ヴァイオリン、金川真弓)など高関のこだわりと的確な指揮が聴衆を惹きつけた(9月)。

愛知県を拠点とする名古屋フィルハーモニー交響楽団、セントラル愛知交響楽団、中部フィルハーモニー交響楽団、愛知室内オーケストラの4つのオーケストラが、「愛知4大オーケストラ」としてタッグを組み、互いに刺激的な活動を続けた。京都市交響楽団は、沖澤のどか常任指揮者の個性際立つプログラミングで新時代を切り開く。6月のジョルジュ・レンツ「ヴァイオリン協奏曲」(日本初演)とフランス近現代の組み合わせも斬新、9月の東京公演では女性作曲家ファランクの交響曲第3番を取り上げるなど彼女のリーダーシップのもと颯爽とした音楽を繰り広げた。

大阪関西万博で沸騰した大阪では、4つのオーケストラ―大阪交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、日本センチュリー交響楽団―が「大阪4オケ2025」(5月)で連携するとともに、各団体の音楽監督、常任・首席指揮者が強い個性を示した。広島交響楽団は、音楽監督クリスティアン・アルミンクと被爆80周年の特別な年を迎えた。九州交響楽団は、首席指揮者・太田弦の2年目のシーズン。毎夏恒例の「フェスタサマーミュージックKAWASAKI」に初参加し、ショスタコーヴィチの交響曲第5番などフレッシュな演奏を聴かせた(8月)。

最後に、昨年も多くの楽団で指揮が予定されていた秋山和慶が1月に急逝した。秋山の日本のオーケストラ界の発展への多大な貢献は、決して忘れてはならない。また、広上淳一が令和6年度(第75回)芸術選奨文部科学大臣賞(芸術振興部門)を受賞した(3月)。アーティスティック・リーダーを務めるオーケストラ・アンサンブル金沢とともに能登半島地震の被災者の日常に音楽を届ける活動は、共生社会における芸術文化活動の展開に示唆を与えるものと評価された。

柴辻純子(しばつじ・じゅんこ)【音楽学・音楽評論】

東京生まれ。桐朋学園大学音楽学部卒業、同大学研究科および慶義塾大学大学院修士課程修了(音楽学専攻)。主な研究領域は新ウィーン楽派を中心とする20世紀音楽、および同時代の音楽。

大学での講義のほか、新聞、音楽専門誌、各種音楽媒体への寄稿を続け、文部科学省文化審議会委員などを務める。また、1990年代からNHK-FM番組で解説、司会を担当。現在は、「ブラボー!オーケストラ」のレギュラー・パーソナリティーとして出演中。

ピアノ

真嶋雄大

21世紀に入って四半世紀が経った。まさに光陰矢の如しである。日本の音楽ホールは1980年代に建設ラッシュが始まり、多くのコンサートが開催されるようになったが、40年以上が経過し、経年劣化や耐震設備による2025年頃からのリニューアル工事のため、東京芸術劇場をはじめ、東京国際フォーラム、Bunkamuraオーチャードホール、新宿文化センター、紀尾井ホールなど全面休館するホールが全国的に相次ぎ、コンサート開催に少なからず影響が生じている。

また2025年はJ.シュトラウスⅡ生誕200年、ビゼー没後200年、サティ没後100年、ラヴェル生誕150年、ショスタコーヴィチ没後50年、そしてブーレーズとベリオが生誕100年にあたるメモリアル・イヤー。鍵盤関連としてはサティにも脚光が当てられたが、就中ピアノ音楽として多数のコンサートやリサイタル、CDリリースに採り上げられたのはラヴェルであった。

ラヴェルのピアノ独奏曲について、殆どの主要作品は1回ないし2回での演奏が可能であるため、国内のリサイタルで全曲演奏が度々開催された。栗原麻樹（4月；東京）、務川慧悟（7月；大阪ほか）、佐野隆哉（9月；東京）、東誠三（5月；東京）、イリーナ・メジューエワ（6月・11月；京都）、仲道郁代（10月；東京）、ジャン・エフレム・パウゼ（全曲 10月；京都ほか）、岡本愛子（5月；東京）、横山幸雄（9月；愛知）、長尾洋史（10月；東京）など。またラヴェル「協奏曲」については務川慧悟（高関健指揮東京シティフィル、10月；東京）、清塚信也（円光寺雅彦指揮東京フィル、10月；東京）、アリス＝紗良・オット（カネラキス指揮東京都響、7月；東京）、角野未来（出口大地指揮東京響、11月；東京）、田村響（スダーン指揮富士山静岡響、11月；静岡）、パスカール・ロジェ（熊倉優指揮群響、7月；群馬）などがあり、8月「NHKパレエの饗宴2025」でダンサーとともに福井真菜が井田勝大指揮東京フィルと「ピアノ協奏曲」を演奏、パレエとのコラボレーションでその華を競った。さらには「左手のためのピアノ協奏曲」では阪田知樹（川瀬健太郎指揮読売日響、5月；東京）、舘野泉（尾高忠明指揮東京フィル、4月；東京）が玲瓏にして抒情豊かな演奏で聴衆を魅了した。

また5月の恒例「ラ・フォル・ジュルネ」でもラヴェルの独奏曲、協奏曲が演奏されたが、CDリリースも百花繚乱。パヴゼやメジューエワなどの他、チョ・ソンジン、ネルソン・

ゲルナー、ベルトラン・シャマユ、ジャン＝イヴ・ティボーデ、アンナ・フェドロヴァなど、日本人も横山幸雄、松本和将、村田理夏子などがリリースしている。

さて2025年はショパン・コンクールの開催年。第19回となった今回は多くのメディアが積極的に採り上げ、大きな話題となったが、日本からは13名が挑戦、第1位エリック・ルー、第2位ケヴィン・チェン、第3位ワン・ズートン、第4位桑原志織他という結果。エリーザベト王妃国際音楽コンクール・ピアノ部門では久末航が第2位、亀井聖矢が第5位に入賞、第9回仙台国際音楽コンクール・ピアノ部門で第1位エリザヴェータ・ウクラインスカヤ、第2位アレクサンドル・クリチコ、第3位天野薫、第4位ユリアン・ガスト、第5位島多璃音、第6位ヤン・ニコヴィッチであったが、天野はまだ11歳での快挙であった。また河合楽器創立90周年記念Shigeru Kawai国際ピアノコンクールでは第2位大山桃暖、第3位朴沙彩、第4位に山本悠流など日本勢の活躍が目立った。

来日ピアニストも活況を呈した。90歳のミハイル・ヴォスクレセンスキーは2月、横浜でリサイタルを、クリスティアン・ベザイデンホウトは4月にフライブルク・バロック・オケとモーツァルトの協奏曲を共演、アンドラーシュ・シフは3月、解散によって最後の来日となるカペラ・アンドレア・バルカと斬新なモーツァルト像を構築、日本での最後のリサイタルとなったアレクセイ・リュビモフは4月にリサイタルを、ルーカス・ゲニューシャスは4月にラフマニノフなどを、アンジェラ・ヒューイットは5月J.S.バッハ・プログラムを、ミハイル・プレトニョフは6月ベートーヴェンとグリーグ、ショパン・コンクール前回覇者のブルース・リウは6月にシャニ指揮ロッテルダム・フィルとプロコフィエフ「協奏曲第3番」に加え9月にはユロフスキ指揮バイエルン国立管とモーツァルト「第23番」を共演、その9月にはイエフィム・ブロンフマンがブラームス、プロコフィエフなどをリサイタルで演奏、アレクサンドル・カントロフは、マケラ指揮RCOとブラームスの協奏曲第1番で共演、レイフ・オヴェ・アンズネスは10月にブロムシュテット指揮N響と同第2番で共演、リサイタルでもシューマン、ショパン、グリーグを、イゴール・レヴィットは11月にシューベルト、

ショパンなどでリサイタルを、かつて時代の寵児となったスタニスラフ・ブーニンが疾病による大手術を乗り越えて復帰、リサイタルに臨んだ。そしてクリスティアン・ツィメルマンは12月、コンサート当日にプログラムを発表するという新機軸を打ち出し、シュベルトやドビュッシー、スタコフスキやJ.S.バッハで新たな境地を綴った。

日本人ピアニストの活動も忘れてはならない。近年若手の台頭が目覚ましいが、2025年もその勢いは止まらず、反田恭平は8月、ザルツブルク音楽祭にデビュー、指揮者、ピアニストとしてモーツァルト管と共演、11月には全国10か所のリサイタル・ツアーを敢行、南仏ラ・ロック＝ダントロン国際ピアノ・フェスティバルには、藤田真央（4年連続）とドイツ「オーパス・クラシック賞」を受賞した角野隼斗（初）が出演、藤田は4月、ルツェルン音楽祭でバヤール指揮ルツェルン祝祭管とベートーヴェン「第4番」を演奏、国内でも阪田知樹が1月、リストのピアノ協奏曲2曲、「死の舞踏」、「ハンガリー幻想曲」で角田鋼亮指揮東京フィルと共演、多くのリサイタルも開催した。前述の亀井は7月にオール・ショパンでリサイタル、川田健太郎、佐藤卓史、中谷政文、前田拓郎、本山乃弘が2022年に結成した男性ピアニスト・グループ「絆」は9月にベートーヴェンの協奏曲全曲演奏会で聴衆の支持を得た。そのほか北村朋幹、三浦謙司、石井琢磨、實川風、高木竜馬、務川慧悟、小井土文哉、第51回日本ショパン協会賞を受賞した牛田智大など男性陣に加え、女性陣は鈴木愛美、中川優芽花、黒木雪音、進藤実優などがそれぞれに真摯かつ重厚なアプローチの演奏活動を展開して新風を巻き起こしている。

むろん若手だけではない。アリス＝紗良・オットは6月にジョン・フィールドにフォーカスしたリサイタルを、小山実稚恵は6月にデビュー40周年記念リサイタルでベートーヴェンの最後期のソナタ3曲に加え、ユロフスキ指揮東京フィルとチャイコフスキーとラフマニノフの協奏曲を、デビュー30周年を迎えた近藤嘉宏は10月ショパンの協奏曲2曲を、内田光子は10月にベートーヴェン最後のソナタ3曲を、小倉貴久子は「フォルテピアノの世界」第15回を10月に開催、佐藤彦大は11月にグラナドス、ラヴェルを、福岡光太郎はベンジャミンとモーツァルトにフォーカスして聴衆を魅了した。

ベテラン勢も健在だ。杉山哲雄はベートーヴェンメモリアルに向けソナタ連続演奏会をスタート、久元祐子はベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲演奏会Vol.3を開催、86歳の深沢亮子は5月にモーツァルトなどでリサイタル、60年以上のキャリアを持つ北川暁子は5月にリサイタル、89歳の館野泉は前述のラヴェルや左手のための新作などを、藝大教授最後の年となった伊藤恵は、リサイタル「春をはこぶコンクールふたたびVol.6」を開催、また三大ピアノ協奏曲を一日に演奏したのが清水和音と若林顕、ともにチャイ

コフスキー「第1番」、ラフマニノフ「第2番」に加え、清水はベートーヴェン「皇帝」、若林はショパン「第1番」で喝采を浴びた。またパスカル・ドゥヴァイヨンと村田理夏子が音楽監督を務める「NAGAREYAMA国際室内楽音楽祭」が11月開催して注目された。

最後に訃報を。藤井一興が1月18日70歳で逝去したが10日前に室内楽コンサートに出演したばかりだった。マリア・ティーボは2月10日に93歳で、6月17日にはアルフレート・ブレンデルが94歳で、杉浦日出夫は5月30日に92歳で、ディヴィッド・ワイルドが10月23日に90歳で鬼籍に入った。ご冥福をお祈りしたい。

2026年は鍵盤界にとってどんな年になるのか、期待は大きい。

真嶋雄大（まじま・ゆうだい）

音楽評論家、作曲家。朝日新聞、「音楽の友」等媒体を始め、演奏会やCDの曲目解説、音楽劇の台本等の執筆、NHK-FM等への出演を続け、全国でレクチャー・コンサートやプロデュースを展開、とりわけ甲府での「特別コンサート」、岡谷での「クラシック探訪」、ペーゼンドルファー「美女と野獣」等は大好評、その模様が「日経ビジュアル音楽堂」で紹介された。著書に「ピアニストの系譜」、「ワールドと32人のピアニスト」等。YCC文化ホール等アドバイザー、「真嶋雄大の面白クラシック」主宰。

器楽（室内楽を含む）

渡辺 和

コロナ禍から足かけ4年が過ぎた2025年は、ウクライナ戦争やイスラエル、米合衆国新政権による国際情勢の不安定さが続くとはいえ、器楽室内楽界には新秩序が見え始めた年となった。

◆ソロリサイタルからフェスティバルへ

コロナ禍後の器楽室内楽ジャンルで変化が著しいのは、サントリーホール、大阪フェスティバルホール、東京芸術劇場、ザ・シンフォニーホールなど1200から2000席規模ホールでの単発リサイタルのあり方だろう。世界を飛んで歩き定期的にCDリリースする外来ピアニストで大ホール独奏を行ったのは、イーヴォ・ボゴレヴィッチ（所沢市民文化センターミュージズ1月26日、サントリーホール1月29日他）、スタニスラフ・ブーニン（高崎芸術劇場1月19日、盛岡市民文化ホール1月25日、ザ・シンフォニーホール11月30日他）、ラン・ラン（サントリーホール2月6日、ザ・シンフォニーホール同10日）、ミハエル・プレトニョフ（愛知県芸術劇場5月31日、ミュゼザ川崎6月8日他）、アリス＝沙羅・オット（サントリーホール6月29日、愛知県芸術劇場7月1日他）、イェフィム・ブロンフマン（東京オペラシティ9月16日）、レイフ・オヴェ・アンズネス（オペラシティ10月30日、兵庫県立芸術文化センター11月3日他）、内田光子（サントリーホール10月28日、同30日他）、イゴール・レヴィット（ミュゼザ川崎11月25日他）、クリスティアン・ツイメルマン（ミュゼザ川崎11月26日、サントリーホール12月3、8日他）など数少ない顔ぶれ。アーシュラ・オッペンズ（五反田文化センター6月20日）、アンヌ・ケフェレック（武蔵野市民文化会館小9月1日、浜離宮朝日ホール同2日）、アブデル・ラーマン・エル＝バシャ（浜離宮朝日ホール10月15日）など玄人好みの巨匠クラスは、中小規模ホール開催が当たり前となる。ちなみに大ホールでの弦楽器奏者独奏ツアーは、ヨーヨー・マ（アクロス福岡9月17日、愛知県芸術劇場9月19日、サントリーホール9月20日）くらいだった。

大ホールは、コロナ禍以降にSNS展開を巧みに利用、新たな聴衆層獲得に成功した若手の大型ライブ会場に変貌しつつある。辻井伸行（サントリーホール2月19日、20日、3月3日、ザ・シンフォニーホール3月9日、札幌コンサートホール3月16日、福岡市民ホール5月24日、他）、反田恭平（サ

ントリーホール11月29日、12月12日、大阪フェスティバルホール12月1日、他）、角野隼斗（サントリーホール2月22日、他）、外来奏者では秋のショパン国際コンクール優勝のブルース・リウ（ミュゼザ川崎3月17日、オペラシティ同18日）、イム・ユンチャン（オペラシティ7月7日）などが、異次元の動員力を示した。11月29日の角野隼斗のKアリーナ横浜公演は前年の武道館公演13,000枚を上回る18,546枚を販売、「屋内のソロピアノリサイタルで販売されたチケットの最多枚数」としてギネス記録となった。

外来室内楽団に関しては、中国、台湾、韓国のみでツアーを行うジャパン・パッシングや渡航費難で来日中止となる団体もあり、日本経済弱体化の現実を突き付けられつつある。そんな中、欧州現役両横綱の共演たるベルチャ Q&エベヌQ（トッパンホール3月28日、神奈川県立音楽堂3月29日）、コロナ禍で中止となった来日を日本在住作曲家テリー・ライリー生誕90年記念としてクラウドファンディングで実現したクロノスQ（神奈川県立音楽堂6月25日、東京藝大奏楽堂6月28日）などは、室内楽ファンを超えた話題となった。

内外の巨匠中堅クラス奏者が集う室内楽は、ホール主催の特別公演や音楽祭などの一部として提供される傾向が明らか。詳細に触れる余裕はないが、東京・春・音楽祭（3月14日～4月20日）、宮崎国際音楽祭（4月20日～5月18日）、別府アルゲリッチ音楽祭（4月20日～7月13日）、金沢ガルガンチュア音楽祭（4月27日～5月5日）、ラ・フォル・ジュルネTOKYO（5月3日～5日）、草津音楽祭（8月17日～30日）、大阪クラシック（9月14日～20日）、仙台クラシックフェスティバル（10月3日～5日）等の大規模総合音楽祭は、数多くの器楽室内楽公演を用意した。室内楽特化の音楽祭としては、サントリーホール・チェンバーミュージック・ガーデン（6月7日～22日）、霧島音楽祭（7月18日～8月3日）、ゆふいん音楽祭（7月25日～27日）、木曾音楽祭（8月28日～31日）、ル・ポン国際音楽祭赤穂・姫路（9月27日～10月4日）、TOPPANホール25周年室内楽フェスティバル（10月2日～8日）、ARK Hills Music Week（10月3日～12日）、北九州国際音楽祭（10月18日～12月7日）、NAGAREYAMA国際室内楽音楽祭（11月1日～3日）等、会場となるホールや地域公益文化財団や実行委員会が主催し、音楽監督を務める奏者を軸に数多くの室内楽が披露された。木曾やゆふ

いん、草津など半世紀もの歴史がある室内楽音楽祭はそれぞれに変革期を迎えつつあり、運営組織の世代交代が大きな課題となっている。

なお、今世紀0年代から続く室内楽器演奏会場の個人経営小規模サロンへのシフトはますます顕著で、上述のホール主催音楽祭は音楽ホールそのもののサロン化とも言えよう。東京に於ける小規模サロンの草分けにして現代音楽の重要拠点ともなっている両国門天ホール代表黒崎八重子の令和7年度文化庁長官表彰受賞は、小規模ヴェニユからの発信の重要性の社会的認知として大いに喜ばしい。

◆世界スタンダードの中での室内楽

宗次ホール弦楽四重奏コンクール（6月28、29日）は、弦楽四重奏専門国内大会として秋吉台と並び貴重な存在である。7年ぶり5度目の開催となった今回、初の海外団体としてベルリン拠点のヴァリオンQが参加、Q風雅と優勝を分けた。多言語対応はないものの規定に国籍制限はなく、岐阜出身の姉弟がヴァイオリンに座る団体の参加に問題ないとはいえ、想定外だったことも事実だろう。

実質上国内に室内楽教育システムがない中韓では珍しいものの、コロナ禍前までは外国拠点で室内楽キャリアを試みた日本出身団体は東京QとロータスQのみだった。一昨年に北米で学ぶQインテグラのチェロが韓国国籍奏者に交代、去る秋には北米からハノーファーに拠点を移す。9月のバンフ国際弦楽四重奏コンクールで日本団体最上位3位を獲得し注目を浴びるQ渾も、東京音大からザルツブルク・モーツァルテウム音楽院に学ぶ課程で中国籍ヴィオラを抱えている。

これらの多国籍アンサンブルが本格的にプロとして活動を始めるには、国境移動や税制上の煩雑な業務など若いヴェンチャー・ビジネスの能力を超えた難題が山積する。誕生しつつある「国際的」室内楽グループをどう日本のマーケットが受け入れ、育てていけるか、活況を取り戻したかに見える日本の器楽室内楽界は新たな課題を突きつけられている。

渡辺 和（わたなべ・やわら）

宗教音楽、室内楽を中心に、演奏会プログラム執筆、音楽芸術エッセイ執筆、演奏家インタビュー、翻訳、通訳など、フリー音楽ジャーナリストとして活動。コンクール、音楽祭、シンポジウムなど、海外取材多数。国際基督教大学大学院比較文化研究化修士課程修了（比較宗教表現論専攻）。1957年千葉県生。コロナ禍以降、東京と大分の二拠点生活中。主な著書：クアルテットの名曲名演奏（音楽之友社）、ゆふいん音楽祭35年の夏（木星社）、クラシックホールをつくる、続ける（水曜社）

オペラ

関根 礼子

オペラは人間の内奥を掘り下げ、社会の現実を鋭く映し出すことができる。2025年に日本は「戦後80年」を迎えて平和を維持しているが、世界では戦争や紛争が絶えない。その激動と混迷の時代の中で、オペラの持ちうる優れた表現力が人間性を深め、平和を願う世相の一端となっていることを筆者は幾度か感じる事ができた。これは我が国においてオペラが声の魅力や舞台の豪華さ等を楽しむ趣味的な段階に留まらず、より深い芸術へ、生活に結びついた文化へと発展してきていることの証しではないだろうか。そのベースには歌唱力を始めとする全体的な表現力の向上がある。

例えばこの年唯一の海外団体だったウィーン国立歌劇場による2つの演目は、全体的な完成度と格調の高さで抜きん出ている。《フィガロの結婚》は2023年の最新の演出（バリー・コスキー）とベルトラン・ド・ピリーの指揮で、《ばらの騎士》は1968年の伝説的な演出（オットー・シェンク）とフィリップ・ジョルダンの指揮で、それぞれ人間の真実を深く描き出した。コロナ禍以降海外からの引越し公演がめっきり減少した中で、こうした欧州の成熟した舞台を観劇できるのも、国際関係が安定し平和であってこそその賜物なのだ。

セイジ・オザワ松本フェスティバルの《夏の夜の夢》も、フランス・リール歌劇場のプロダクションを使用したロラン・ペリーのスケール感抜群の夢幻的な演出が傑出。その特長を沖澤のどかの指揮が柔軟かつ適切に生かして作品の魅力を最高度に引き出した。キャストは全員海外からの起用。サイトウ・キネン・オーケストラは熟練の演奏でブリテンの音楽の美しさを堪能させ、OMF児童合唱団も十分に訓練されて舞台を彩った。ブリテンといえばこのところ国内複数のオーケストラが相次いで《戦争レクイエム》を演奏し、大きな感動と平和への願いを熱くアピールしている。併せて鑑賞することで、兵役を拒否し平和を心から愛した作曲者の自立した精神の豊かさを感じ取ることができた。

日本と世界の現実にもっと直接的に切り込んで日本オペラが新しい段階に入ったことを感じさせたのは、新国立劇場が5年ぶりに初演した創作委嘱作品《ナターシャ》だった。主人公の男女2人の難民（イルゼ・エーレンス、山下裕賀）が地獄巡りをする途上、自然は破壊され、災害が起こり、人々は快楽におぼれ、ビジネスに狂う。政争やジェンダーの問

題等も織り込まれ、人間の傲慢さが嘆かれる。そして、地獄の底から再出発する静かな音楽で幕となる。これまでも日本には原爆や戦乱、環境破壊等の社会的テーマによるオペラはあったけれど、《ナターシャ》が画期的だったのは、より世界的な視野から今の社会を問うていることだ。台本（多和田葉子）は多言語で書かれ、場所や時代は特定されず、作曲（細川俊夫）にも様々な様式が混在して、多様な価値観が混在する今日の世界を映し出していた。

新国立劇場のもう一つの新制作《ヴォツェック》では、リチャード・ジョーンズの演出により、現代社会の孤独、孤立感、共生感の希薄さ等をもたらす悲劇が重厚に表現された。ちょうど100年前に世界初演された同作が、今日の社会情勢の中で蘇った感じだ。題名役を2ステージ好演したトーマス・ヨハネス・マイヤーはその後体調不良でカヴァーの駒田敏章に交代し、その駒田の健闘も伝えられた。駒田は《ラ・ボエーム》のショナールも本役で立派にこなしている。同劇場では急な代役でもきちんとこなせるカヴァー歌手が増えており、従来の常連に加えて新たな国内歌手の成長が実感できた一年だった。

年末にアンサンブル・ノマドが「演奏会形式舞台上演」として日本初演したヴィクトル・ウルマン作曲の喜歌劇《アトランティスの皇帝》は、ナチスの強制収容所に収容されていた1943年に作曲され、奇跡的に楽譜が遺されたもの。独裁者（須藤慎吾）のあまりの横暴ぶりに怒った死神（大塚博章）の作戦で、独裁者が自殺し戦争が終わるといふ、そのものずばりの政権批判だ。作曲者は翌年ガス室で殺されている。過去の歴史を振り返り、抵抗した人々の姿に思いを寄せることに、今どれほど大きな意味があるかはいうまでもない。

ここまで強烈な社会性はないにせよ、人間の内面やドラマに新たな光を当てた舞台が、東京二期会によって提供された。3例で紹介したい。《カルメン》ではイリーナ・ブルックの演出が、無国籍で今風の若者群像を描くことで、これまでの同作とは一風変わった新鮮な感覚を振りまいた。キャストがみせた歌唱や演技には自発的に湧き出たような感触が濃く、それだけ日本人の感性に添った人物像だったともいえる。《イオランタ》の作中に《くるみ割り人形》の一部をはめ込んだ公演では、ロッテ・デ・ベアの演出で若い女性の内心の世界がファンタジックに深められていた。

「目が見えるようになる」という設定を越えて、保護されていた少女期から自我に目覚め、精神的に自立して大人の世界に入っていき通過儀礼の創意豊かな表現だ。ウィーン・フォルクスオーパーとウィーン国立バレエ団との共同制作。この2公演にはブーイングも出たが、オペラを若い世代をはじめとするより幅広い層にアピールしうる可能性はある。また、コンチェルト・シリーズとして演奏会形式で上演された《ファウストの劫罰》でも、アニメ調をまじえた新感覚の映像（上田大樹）が演奏会形式上演の可能性を開いていた。以上、演出中心に述べたが、音楽面も負けず劣らずしっかりした取り組みがなされ、説得力のある歌唱で舞台成果を高めた歌手が何人かいたことを評価したい。

静岡音楽館AOIが開館30周年記念で演奏会形式上演した《ナクソス島のアリアドネ》は、国内トップクラスの歌手と器楽奏者を集め、沼尻竜典指揮で燃焼度の高い演奏を堪能させた。神奈川県立音楽堂と兵庫県立芸術文化センターが濱田芳通&アントネッロと共催した《オルフェオ》も、民間団体の力をホールが支えることで一段と充実した公演となった。このほかびわ湖ホール、藤沢市民オペラ、北とびあ等複数のホールや団体がそれぞれに健闘し、オペラ界全体としては実りの多い年だったといえる。

こうした成果の一方で、運営面での困難は増大している。コロナ禍後に続いている諸物価の高騰、助成金や寄付金等の減少、人材不足、ホール不足などが影を落とし、とりわけプロフェッショナルな中小規模公演や中小都市の地域型公演に打撃が大きい。その結果公共ホールの役割が決定的なほど重要になっており、地域に根差したオペラ活動の今後は地域の公共ホールの出方如何にかけられているといっても過言ではない。

そうした財政上の困難さや社会風潮の変化等を背景に、ギャラやキャスト起用にまつわる問題やセクハラ、パワハラといった演劇界・オペラ界で従来とかく見過ごされがちだった問題が一部で顕在化した。歴史の古い某オペラ団体では内部から訴えが起こり、組織体制の転換を余儀なくされている。他の団体にとっても決して人ごとでは済まされない問題で、ほんの四半世紀前までは「手弁当精神」や「男性優位」が常態だったこの業界にも、ようやく改革の波が出てきたように見える。これを機により良い方向に進むことを願いたい。

関根礼子（せきね・れいこ）

国立音楽大学楽理学科卒、音楽旬報社勤務中より音楽評論、研究に従事、1981年からフリー。文化庁芸術祭審査委員、芸術文化振興基金専門委員他。昭和音楽大学オペラ研究所嘱託研究員として『日本のオペラ年鑑』初代編纂委員長を経て現在編纂委員。三菱UFJ信託芸術文化財団、ニッセイ文化振興財団、東京オペラシティ文化財団の各理事。主な著書に『日本オペラ史1953～』（水曜社、2011）、『オペラの世界』（三一書房、1983）、『オペラ事典』（東京堂出版、2013、共著）ほか。佐川吉男音楽賞実行委員ほか。

声 楽

国土潤一

今回も聴いたものからの選択羅列になる。

1月21日には「B→C」でのソプラノの松島理紗を聴く（東京オペラシティ リサイタルホール）。桐朋学園からウィーンを経て、現在ドイツの現代音楽の現場で活躍している人物で、高い声楽技術に支えられた鮮やかな歌唱。この数十年での日本人声楽家の発声技術の進歩、向上をまざまざと感じる。

1月25日には「仲道郁代 言葉を奏でる」と題したシリーズの初回を聴いた（HAKUJU HALL）。バリトンの加来徹をソリストとして、ベートーヴェンの「遙かなる恋人に寄せて」とシューベルトの「白鳥の歌」を核としたプログラム。声楽家がソロ・ピアニストを選ぶのではなく、ピアニストが声楽家をチョイスしてプロデュースするのは、内田光子やマリア・ジョアン・ピリスなどの前例もあるが、その国内ヴァージョン。仲道のドイツ語能力があつての企画であるし、声楽界の「黒船」として、今後も注目すべきシリーズとなるだろう。

3月19日には「東京・春・音楽祭」の一貫としてクリスティアン・ゲルハーエルとゲロルト・フーバーによる「シューマン・プログラム」を聴いた（東京文化会館・小）。昨今は少なくなったドイツ・リートコンサートを求めて多くの聴衆が詰めかけていた。客席は大いに沸いていたが、フィシャー＝ディースカウやヘルマン・プライ、ペーター・シュライアーらのドイツ・リートを知る筆者の世代にとっては、声楽技術の向上に反して歌唱内容の真摯さ、切実さに虚飾を感じずにはおれない。ドイツ・リート界の変容こそが、このジャンルの或る種の衰退の原因なのかもしれない、と思った。そういえば2025年は、フィシャー＝ディースカウの生誕100年だった。

5月9日は日本歌曲協会の「春のステージ」を聴いた（渋谷区文化総合センター大和田さくらホール）。同協会の創立20周年記念であると同時に「故・深海さとみ名誉会員を偲んで」という副題も持つ。「邦楽器とともに」というこの協会の歴史は、深海さとみと共にあった。通常接点を持たない洋楽と邦楽の「歌」の分野での重要な接点として、この協会の持つ意義は大きい。

5月13日は「B→C」でのソプラノの高橋維を聴く（東京オペラシティ リサイタルホール）。既に二期会のオペラ公演でも活躍する高橋だが、このシリーズらしい「攻め」の

プログラムで、オペラ公演では伺い知れない高橋の違う側面に出会えた。二期会のオペラ公演が、高橋のこのような多彩な素養を生かし切れていたのか、と改めて思う。

6月7日に第22回二期会日本歌曲研究会演奏会を聴いた（旧東京音楽学校奏楽堂）。12人の歌手が、それぞれに選んだ様々な作品を演奏したが、正に「日本語歌唱の問題点の見本市」のような混沌たる状況だった。歌とは何か、言葉とは何か、という根本的な問題提起にまでその原因は遡れるかもしれない。

7月22日は、恒例の「新作歌曲の会」に出掛けた（東京文化会館・小）。今回で第25回を数える。鈴木静哉の作品が心に残った。

10月4日にはベテラン・バリトンの末吉利行のリサイタルを聴いた（きらら鎌倉ホール）。「私の音楽人生」と題した多彩なプログラムを、盟友とも呼ぶべき花岡千春のピアノが支えた。

10月7日の「B→C」に、テノールの山本耕平が登場した（東京オペラシティ リサイタルホール）。山本も既に二期会を始めとするオペラのシーンで存在感を示しているが、このシリーズの楽しみは、どのようなプログラミングを組み立てるかだ。ペルクの「ルル」の1曲では、夫人の高橋維の助演もあり、様々な可能性が展開された。

10月15日の東京文化会館主催公演「プラチナ・シリーズ」に登場したのはイタリアのテノール、ルチアーノ・ガンチ。華麗で燦然たる歌唱は、「イタリアのテノール」の魅力を満喫させてくれた。「アイダ」や「トゥーランドット」もレパートリーにしているそうだが、本領はリリコのレパートリーで発揮されるように見える。アンコールで歌われた「誰も寝てはならぬ」と「女心の歌」での歌唱が、それを見事に証明していた。20世紀では厳然と守られていた歌手のレパートリーの区分が、イタリアでも消失しているのを、改めて残念に思う。

10月29日、ソプラノの針生美智子のリサイタルを聴く（古賀政男音楽博物館けやきホール）。モーツァルトシンガーズジャパンの仲間でもあるバリトンの宮本益光が賛助出演し、司会も務め、ピアノの高田恵子が支えた。前半がモーツァルト、後半がドニゼッティの「ルチア」からのナンバーと、オペラを主戦場とする針生らしいプログラム。良くトレーニングされた声と、真摯な表現によって、心地良い時間を

堪能した。

フランスの名ソプラノ、ナタリー・デセイが、フィリップ・カサールと共に日本でのフェアウエル・コンサートを行なった（11月6日、東京オペラシティ）。冒頭のモーツァルト・ステージでは「フィガロの結婚」から、バルバリーナ、スザンナ、ケルビーノ、伯爵夫人のアリアを、カサールの雄弁にして洒落なアレンジで曲間を繋ぎながら織り上げた。続くフランス歌曲のステージ、後半の英語のプログラムと、プログラミングの熟考された内容と、それを香り高く演奏へと転化して行くデセイとカサールのステージがもう見られなくなるという寂しさを、今改めて噛み締めている。プログラミングもまた、芸術家としてのセンスが鮮やかに反映される。この稀有な芸術家の「お別れコンサート」を聴きに来なかった（状況が許さず来られなかった、のではなく）声楽家は、声楽家として接するべき大事な「何か」を見逃したことになるだろう。

11月21日にはソプラノの森野美咲が、ヘルムート・ドイチュとリーダー・アーベントを開いた。日本人声楽家が広い第一生命ホールでリサイタルを開くというのは、昨今では余り無いだろう。前半にR.シュトラウス、後半にリスト歌曲をヘルマン・ロイター作品の前後の配するという重厚なプログラムを、油の乗り切った森野の歌声が鮮やかに紡ぎ上げる。リストの歌曲の魅力にこの夜、多くの聴き手は気付いたかもしれない。

ここで取り上げるべき公演か定かではないが、12月12日には古楽団体である濱田芳通とアントネッロの第20回定期演奏会を聴いた（横浜みなとみらい小ホール）。中世ブラヌス写本による「カルミナ・ブラーナ」というプログラムを、術学趣味に陥らずに、良い意味でのエンターテインメント性に満ちたステージで繰り広げた。演奏の質は言うに及ばず、ステージングや字幕の工夫など、現代の日本に生きる我々を愉ませてくれる工夫に溢れた時間が紡ぎ出される。最近のアントネッロの充実が反映された公演を堪能した。

国土潤一（こくど・じゅんいち）

昭和31年東京生まれ。東京芸術大学声楽科、同大学院修士課程修了後、旧西ドイツ国立デトモルト音楽大学に留学。声楽を伊藤亘行、川村英司、山路芳久、テオ・リンデンバウム、リヒャルト・ホルム、ドイツ語舞台発音法をハンス・クールマン、合唱指導法を田中信昭に師事。帰国後の1988年から演奏活動の他に、音楽評論を「レコード芸術」誌を出発点に開始し今日に至る。「歌の本」を2021年に音楽之友社より上梓する。

合唱

戸ノ下 達也

益々混沌とする国内外の情勢に直面した2025年は、敗戦80年という歴史に向き合う一年だった。

2025年も、プロ合唱団が果敢な活動を展開した。

2025年から水戸博之が常任指揮者に就任した東京混声合唱団は、1月に第266回定演（指揮・キハラ良尚）、2月に第267回定演（指揮・川瀬賢太郎）と大阪定演No.29、5月にコン・コン・コンサート（指揮・相澤直人）、8月に東混八月のまつり46（指揮・山下一史）、9月に東混オールスターズ～田中信昭を偲んで～、11月に第268回定演（指揮・水戸博之、山田和樹）、12月に住友生命いずみホール定演No.30等の主催公演を開催した。新作は、キハラ良尚、信長貴富に委嘱されている。

室内合唱団日唱は、4月に第40回定演「受け継がれる魂」（指揮・中館伸一）を開催した。

神戸市混声合唱団は、1月に「阪神・淡路大震災30年メモリアルコンサート」（指揮・佐藤正浩）、3月に春の定期演奏会「阪哲朗の合唱」（指揮・阪哲朗）、5月に「合唱コンクール課題曲コンサート」（指揮：佐藤正浩）、8月に「いろとりどりの音楽会」（指揮・坂入健司郎）、9月に秋の定期演奏会「人間の顔～戦後80年に捧ぐ」（指揮・佐藤正浩）、神戸市室内管弦楽団合同定演で11月にベートーヴェン「ミサ・ソレムニス」（指揮・鈴木秀美）のほか、地域連携として「あなたに贈るコンサート」を2回開催した。

びわ湖ホール声楽アンサンブルは、3月に第80回定演「笑いと涙」（指揮とピアノ・クリスティアン・コッホ）、8月に「美しい日本の歌」（指揮・本山秀毅）、9月に「田中信昭氏追悼公演」、11月に第81回定演と第16回東京公演「レクイエム」（指揮・阪哲朗）等の主催公演のほか、「びわ湖の春音楽祭2025」では滋賀県高等学校合同合唱団との共演や「びわ湖ホール声楽アンサンブル公演」（指揮・村上寿昭）も開催した。「オペラへの招待」シリーズは1月にヴァイル「三文オペラ」（指揮・園田隆一郎）、びわ湖ホールプロデュースオペラは3月にコルンゴルト「死の都」（指揮・阪哲朗）、7月にレハール「メリー・ウィドウ」（指揮・阪哲朗）を開催した。また、「びわ湖ホール音楽会に出かけよう！」（指揮・阪哲朗）は、5月から6月に6日間12公演が実施された。

ヴォクスマーナ（Vo human）は、3月の第53回定演で斉木由美と池田拓実、10月の第54回定演で福士則夫と三輪真弘、毎回のアンコールピースは引き続き伊佐直治の委嘱

新作を初演した。

東混と神戸市混声は、引き続きアウトリーチも積極的に取り組んだ。東混は、文化庁の学校巡回公演8地域の10校、その他のアウトリーチを6地域で、また神戸市混声は、2025年度から神戸市内の特別支援学校（3校、延べ7公演）でアウトリーチを開催した。中学校部活動の地域展開など、文化芸術活動と地域連携が喫緊の課題となっている今、前述のびわ湖ホールも含め、プロ合唱団の取組みは、更なる深化が期待される。

オーケストラ演奏会では、敗戦80年を意識した作品が紡がれている。

1月には、仙台フィル第378回定演でホルスト「惑星」（コロディア・プラネテス）、兵庫芸術文化センター管弦楽団（以下、PACオケ）第156回定演でマーラー交響曲第8番「千人の交響曲」（マーラー「千人の交響曲」合唱団）。

2月には、大響第277回定演でヴェルディ「運命の力」（大響コーラス）、関西フィル第352回定演でベートーヴェン「ミサ・ソレムニス」（関西フィル合唱団）、京響第697回定演でラヴェル「ダフニスとクロエ」（京響コーラス）、東京シティ・フィル第376回定演で伊福部昭「釈迦」（東京シティ・フィル・コア）、都響第1016回定演でショスタコーヴィチ交響曲第13番「バービ・ヤール」（エストニア国立男声合唱団）。

3月には、神戸市室内管第166回定演でヴォーン・ウィリアムズ「野の花」（神戸市混声）、東京シティ・フィル第377回定演でヴェルディ「レクイエム」（東京シティ・フィル・コア）、日フィル第768回定演でマーラー交響曲第2番「復活」（東京音大）、読響第646回定演でベルク「ヴォツェック」（新国合唱団、TOKYO FM少年合唱団）。

4月には、N響第2036回定演でマーラー交響曲第3番（東京オペラシンガーズ、NHK東京児童合唱団）、大フィル第587回定演でエルガー「ゲロンティアスの夢」（大フィル合唱団）、関西フィル第354回定演で伊藤康英「ぐるりよど」（関西フィル合唱団）、神戸市室内管が第167回定演でヴァスクス「われらに平和を与えたまえ」（神戸市混声）、札幌が第668回定演でマーラー交響曲第2番「復活」（札幌合唱団他）、新日フィル第662回定演でバーンスタイン「ミサ」からと交響曲第3番「カディッシュ」（晋友会合唱団、東京少年少女合唱隊）、都響第1020回定演で黛敏郎「涅槃交響曲」（東

混), 山響第324回定演でメンデルスゾーン「夏の夜の夢」(山響アマデウスコア)。

5月には、オーケストラ・アンサンブル金沢第493回定演でハイドン「天地創造」(コーロ・リベロ・クラシコ), 九響第430回定演でプッチーニ「トスカ」(九響合唱団, 筑紫女学園中学校合唱部)。

6月には、東京シティ・フィル第379回定演でヴォーン・ウィリアムズ「我らに平和を与えたまえ」(東京シティ・フィル・コア), 名フィル第535回定演で尾高惇忠「春の岬に来て」(名大コーロ・グランツェ), 東響第731回定演でロッシェニ「スターバト・マーテル」(東響コーラス)。

7月には、九響第432回定演でブルックナー「テ・デウム」とモーツァルト「アヴェ・ヴェルム・コルプス」(九響合唱団), 東響第732回定期でブリテン「戦争レクイエム」(東響コーラス, 東京少年少女合唱隊), 日フィル第772回定演でホルスト「惑星」(東京音大)。

8月には、京響第703回定演でモーツァルト「レクイエム」(京響コーラス), PACオケ第161回定演でブリテン「戦争レクイエム」(ブリテン「戦争レクイエム」合唱団)。

9月には、大響第282回定演でヴェルディ「レクイエム」(大響コーラス), 神奈川フィル第407回定演でリスト「ファウスト交響曲」(神奈川ハーモニッククワイア), 紀尾井ホール室内管第114回定演でメンデルスゾーン「夏の夜の夢」(東京公演/TOKYO FM少年合唱団, 大阪公演/大阪すみよし少年少女合唱団), 東響第734回定演でバッハ「マタイ受難曲」(東響コーラス), 東京シティ・フィル第381回定演でヴェルディ「ドン・カルロ」(東京シティ・フィル・コア), 日本センチュリー響第292回定演でラヴェル「ダフニスとクロエ第2組曲」(日本センチュリー合唱団), PACオケ第162回定演でブルックナー「キリストは従順であられた」(ブルックナー「テ・デウム」合唱団)。

10月には、N響第2046回定演でストラヴィンスキー「詩篇交響曲」とメンデルスゾーン交響曲第2番「讃歌」(スウェーデン放送合唱団), 関西フィル第359回定演でヴェルディ「レクイエム」(関西フィル合唱団)。

11月には、N響第2048回定演でホルスト「惑星」(東京オペラシンガーズ), 第2049回定演でラヴェル「ダフニスとクロエ」(二期会合唱団), 群響第613回定演でマーラー交響曲第8番「千人の交響曲」(群響合唱団, 藤岡市立小野小学校合唱部), 神戸市室内管第170回定演でベートーヴェン「交響曲第9番」(神戸市混声), 日フィル第776回定演でプーランク「スターバト・マーテル」(東京音大他)。

12月には、大フィル第593回定演でラヴェル「ダフニスとクロエ」(大フィル合唱団), 中部フィル第101回定演でベートーヴェン「ミサ・ソレムニス」よりと交響曲第9番(NUAハルモニア合唱団, 名古屋芸大, こまき第九2025特別合唱団), パシフィックフィルハーモニア東京(以下, PPT)第178回定演でベートーヴェン交響曲第9番(武蔵野

音大, PPTクワイア), PACオケ第165回定演でベートーヴェン交響曲第9番(ベートーヴェン「第九」合唱団)を演奏した。

季節イベントでは、「東京・春・音楽祭」で、合唱の芸術シリーズNo.12ベートーヴェン「ミサ・ソレムニス」(東京オペラシンガーズ), 第45回草津国際音楽フェスティバルでは、サリエリ「サルヴェ・レジーナ」「誕生日カンタータ」とJ・シュトラウスII「全世界を統べられる神よ」(草津アカデミー合唱団)が演奏された。

合唱の全国組織も独自の活動を展開し、文化振興施策を推進した。

一般社団法人全日本合唱連盟(理事長・長谷川冴子)は、3月に横浜市でJCAユースクワイア, 8月に山形市で全日本おかあさんコーラス全国大会, 全日本合唱コンクール(10月に富山市で中学校・高等学校部門, 11月に浜松市で小学校部門と佐賀市で大学職場一般部門), 12月に藤岡市でこどもコーラス・フェスを開催したほか、合唱講座「はじめてのコーラス」を4月, 7月, 9月, 12月に各2回開催した。また中学校の部活動地域展開対応で3月にビギナー指導者養成講座, 6月に実践事例研究セミナーを開催した。

一般社団法人日本合唱指揮者協会(理事長・名島啓太)は、6月13日から15日に、セミナーや四つのコンサートで構成された「JCDA合唱の祭典2025~第25回北とびあ合唱フェスティバル~」を開催したほか、テーマ別のオンライン講座「JCDAコーラスアカデミー」を継続実施した。

一般社団法人音楽樹(理事長・藤井宏樹), 音楽樹は、毎年GWの「Tokyo Cantat」で、第9回若い指揮者のための合唱指揮コンクール, コンサート2公演, 合唱指揮マスタークラス等を開催した。また3月にセミナー「春のアトリエ」を3日間, 8月の「ハケ岳ミュージックセミナー」は中川俊郎をテーマ作曲家として4日間, 11月に「コロ・フェスタ2025in桐生」を開催した。

一般社団法人東京国際合唱機構(理事長・松下耕)は、7月に第一生命ホールで「第7回東京国際合唱コンクール」と「第11回日本国際合唱作曲コンクール」, 8月に横浜みなとみらいホールで「うたフェスJAPAN'25」, 11月に第一生命ホールで「二十億光年のまつり」を開催した。

合唱振興の取組みが継続した一年だったといえよう。

戸ノ下達也(とのした・たつや)

1963年東京都生まれ。立命館大学産業社会学部卒業。考察課題は近現代日本の社会と音楽文化・文化政策。

著書に『戦時下日本の娯楽政策』(青弓社), 『「国民歌」を唱和した時代』(吉川弘文館), 『音楽を動員せよー統制と娯楽の十五年戦争』(青弓社), 編著書に『日本の合唱史』(青弓社)など。

第5回JASRAC音楽文化賞受賞。

都留文科大学非常勤講師。

一般社団法人全日本合唱連盟理事, 一般社団法人日本音楽著作権協会理事。

吹奏楽

中橋 愛生

1月7日に汐澤安彦が死去し、2月17日に東京佼成woと東京吹奏楽団が7人の指揮者による追悼合同演奏会を行なった。1月26日には秋山和慶が逝去。この二大指揮者を失ったことから始まった年は、12月9日の秋山紀夫の訃報で終わる。戦後日本の吹奏楽界を牽引した巨匠たちの死はあまりにも大きい。2025年は「1つの時代が終わった年」として後世に残るだろう。

■イベント

大阪・関西万博は特筆すべきイベント。4月12日の開幕式では地元オオサカ・シオンwoが演奏、陸上自衛隊の音楽隊もファンファーレなどを演奏。シオンはテーマソングの編曲を委嘱し全国へ演奏を呼びかけるなど万博に広く協力した。5月11日には「プラスエキスポ2025」の一環として会場の大屋根リングで333団体・12,269人によるマーチングのギネス世界記録を達成。6月8日には関西のバンドが集まり「いのち輝く吹奏楽」を開催。8月25日には大阪市内の中高生による「たそがれコンサートin EXPO」を開催。来日団体も数多く、4月の「ウェールズ・デー」に合わせ同地の金管バンド「トングウィンライス・テンペランス・バンド」が万博会場のほか14日から20日まで日本各地で公演。6月29日にカンザス大学weが大阪芸大と合同で演奏。6月末から7月頭にかけてはオーストラリアの金管バンド「ブリスベン・プラス・バンド」が公演、同団は東京で開催された「東京プラスバンド祭」にも特別出演した。9月24日・25日の「ザルツブルク・デー」にはモーツァルト音楽院と大阪音大の学生によるクロス・カルチュラル・チューバプロジェクトのパフォーマンス。10月にはイタリア陸軍音楽隊が演奏。他、6月21日に100人のマリンバ奏者による「マリンバンパク」など様々な管打楽器のイベントが行われたのだが、それらの詳細は事前も事後もほぼ周知されておらず、まとまった記録も無い。1970年の大阪万博が「吹奏楽の祭典」とされたのに比べ寂しい限り。

その他のイベントについて。3月16日に浜松でのバンド維新2025で鈴木英史と北爪道夫の新作を含む全8曲が披露された。4月26日に金沢にて開催された「ガルガンチュア音楽祭」では「吹奏楽の祭典」に北陸のアマチュアバンド11団体と昭和音大wsが出演。毎年5月に行われる日本吹奏楽指導者クリニックは韓流アイドルのワールドツアーの影

響で宿泊地が確保できなくなり中止。代わりにオハイオ州立大wsなど元々出演を予定していたバンドを集めた特別コンサートを5月17日に開催。6月1日には甲子園プラスバンドフェスティバルが開かれ8つの高校バンドが応援曲やマーチングの演奏を披露。

■国内団体の動き

戦後80年ということもあり、自衛隊音楽隊の活動が目立つ。陸上自衛隊は3月10日から12日にかけて中央音楽隊がオーストラリアにて同国陸軍音楽隊と合同演奏。9月6日に中央音楽隊・東部方面音楽隊がバブアニューギニアの独立50周年を記念してポートモレスビーでの軍楽祭に参加。12月に音楽隊隊員がジブチ共和国に音楽隊育成支援として派遣される。海上自衛隊は2月10日に東京音楽隊が用賀から立川に移転。10月初旬に音楽隊がグアテマラで同国軍楽隊と合同演奏会。航空自衛隊は2月7日に航空中央音楽隊がオラフ・オット (Trb) を招いて特別公演。3月21日に航空自衛隊70周年として各方面音楽隊が合同演奏。4月24日から27日にかけて航空中央音楽隊がアメリカ・ヴァージニア州ノーフォークで開催された国際軍楽祭に出演。米空軍ヘリテージ・オブ・アメリカ・バンドとの合同演奏会も行う。9月には航空中央音楽隊の金管五重奏がイギリスとドイツに派遣され各地で演奏したほかイギリス王立コールドストリームバンドおよびヨーマンリー連隊バンドやドイツ連邦軍参謀軍楽隊と合同演奏会。

自衛隊以外について。東京佼成woが定期演奏会を年5回に増加、5月18日に都内中学生との「絆コンサート」を6年ぶり開催、12月19日には保科洋の新編曲でベートーヴェン第九公演（共演：東京混声合唱団）。東京吹奏楽団は12月18日に佐々木新平指揮者就任記念コンサート。オオサカ・シオンwoは4月1日よりダグラス・ボストックを首席客演指揮者とし海外展開を見据える。広島woは被爆80周年を契機に「平和定期演奏会」シリーズを開始し10月11日に第1回。日本we《桃太郎バンド》は代表・鈴木英史の還暦記念コンサートを2月22日と24日に大阪と東京にて委嘱作品8曲を含む意欲的なプログラムで開催。プロウインドオーケストラ北海道が3月22日にデビュー公演。音楽大学の動向としては3月27日に桐朋学園大ジュニアwoが第1回演奏会を行い小学校4年生から高校生までが大学生・教員と一緒に演奏

する活動を本格化したのが目新しい。

■海外との交流

アメリカへは、毎年元旦の恒例であるローズパレード2025に京都橘高校が出場。

アジア圏では、8月25日と26日にシンガポールで開催されたアジア太平洋吹奏楽指導者協会「APBDAシンガポール2025」に神奈川大学が22日のオープニングコンサートとガラコンサートなど4つの公演に出演。同イベントにはNiconico Sounds in BRASSも参加しアニメ音楽などを演奏。12月25日から29日まで浜松聖星高校が香港演奏旅行。

例年のように台湾との交流が厚く、6月6日から7日まで広島woが桃園管楽嘉年華にて下野竜也の指揮で2公演。10月17日に大井剛史の指揮で東京佼成woがアニメ音楽を中心とした演目で台湾公演。12月下旬の嘉義市国際管楽節には奈良学園大マーチングバンド部、熊本工業高校、拓殖大学紅陵高校（千葉）、龍谷大学付属平安高校（京都）が出演。

ヨーロッパでは、3月26日に日本高等学校吹奏楽連盟の主催で全日本ユース選抜吹奏楽団がブラハで演奏会。8月15日から18日にかけて浜松市民吹奏楽団がドイツで開催されたマルクグリュオーニンゲン国際音楽祭に出演。

海外バンドの来日も盛ん。3月には茅野市がアメリカ・コロラド州ロングモント市の高校選抜吹奏楽団を招き地元の中高生と合同演奏会、4月に下野市がドイツ・ディーツヘルツタール市の楽団ブリーツホイザ・プレヒクラッペンを呼ぶなど、姉妹都市関連の招聘が目立つ。4月20日には台湾の国立南科国際実験高級中学吹奏楽団が石川県吹奏楽連盟主催の「フレンドシップ・コンサート2025」に出演、4月下旬には宮崎国際音楽祭のオープニング「みやざき国際ストリート音楽祭」に台湾師範大付属高級中学管楽隊が参加。このような海外の中高生の来日交流演奏は他にも多数あった。大学でも、5月7日にアメリカ・ウォートバーグ大学が来日公演、前日には帝京大学と合同演奏会も行っている。5月中旬に来日した前述オハイオ州立大学wsは各地で公演している。

■その他の話題

3月に行われた国際コンクール「WIND STARS 2025」吹奏楽リモート審査部門で北海道教育大スーパーウィンズがグランプリ、11月29日に「ワルシャワ国際吹奏楽指揮者コンクール」で柴田昌宜が第1位を受賞したのは、未来への希望と考えたい。

中橋愛生（なかはし・よしお）

作曲家。1978年生。東京音楽大学および同大学院を修了。第71回（2002年）日本音楽コンクール作曲部門第三位、第18回（2008年度）日本管打・吹奏楽学会アカデミー賞、日本吹奏楽指導者協会「下谷奨励賞」（2009年および2010年）を受賞。2008年よりNHK-FM「吹奏楽のひびき」パーソナリティも務める。現在、東京音楽大学教授、国立音楽大学・日本大学芸術学部各講師、日本管打・吹奏楽学会理事、日本管楽芸術学会正会員。

作曲

石塚 潤一

昨年のこの欄も、円安の話題から稿を起こしたのだった。1ドルが157円台という円安状態で開始された2025年、ドルは140円を下回ることは一度もなく、加えて、対ドルのみならず対ユーロの円安も進み、1ユーロ162円台から開始した為替は、いまや180円を突破する危機的状況である。各国の物価、賃金などを考慮した、実質実効為替レートをみると、今や円の實力は変動為替相場へと移行した1973年2月以前のレベルへと落ち込んでいる。重要な論点なので繰り返しておく。クラシック音楽とは、元来、欧米からの輸入物であるわけだから、当然、為替レートの影響を大きく受ける。海外からの音楽家招聘の経費は増大するし、海外留学を目指す若者にとっては、経済面でのハードルがひと際高くなるだろう。経済的に潤沢な基盤をもつだけが海外での研鑽を続けられるという状態は決して健康的ではない。作曲界、ひいてはクラシック音楽界の総合的な地盤沈下をもたらすだろう。音楽関係者だって、経済、そして政治と無縁には生きられない。昨年、個人レベルでは海外からのゲストの招聘はほとんど不可能との、悲鳴のような声を幾つか聞いた。筆者も年始から海外に幾つかの出版譜を注文し、その価格に閉口したところ。読者諸賢が、この厳冬の世を無事に生き抜かれんことを切に祈念するものである。

そのような時代にあっても、新しい音楽は生まれ、新しい世代が活躍しはじめる。ことに作曲との関連でいうと、ここ数年で、若手から中堅が組織する、現代音楽の演奏の新しい団体が生まれているところが目を惹く。たとえば、ピアニストの田中翔一郎が代表をつとめるアンサンブル・プラットフォーム、作曲家の久保哲朗によるアンサンブル・トーンシーク、フルート奏者の内山貴博が組織し、作曲家の山本哲也が監督するアンサンブル・リカレンス、作曲家／指揮者の浦部雪を中核とした演奏家たち。彼らはそれぞれ、リゲティの《ピアノ協奏曲》(8/14) や、ブーレーズの《ル・マルトール・サン・メートル》(9/12, 9/22), 《デリーヴィ》(10/9), グリゼーの《ヴォルテックス・テンポラム》(9/13, 9/19) を披露するとともに、日本人若手の作品を組み合わせ(佐原光, 中嶋達郎, 波立裕矢8/14, 河西祐季, 渡部瑞基 9/12, 9/22, 北爪裕道, 斎藤拓真 10/9) たり、別に自らの個展を開催したり(浦部雪12/19) している。

また、2025年は、芥川也寸志(生誕100年)、福士則夫(同80年)、細川俊夫、南聡、藤枝守(同70年)、権代敦彦(同60年)の記念年であった。芥川也寸志においては、その名を冠したサントリー芥川也寸志作曲賞の選考会(8/30)冒頭で作品が演奏された他、日フィル(5/9, 5/10)、都響(6/5)などが作品を取り上げ、アマチュアオーケストラの新交響楽団が3回に亘ってその名を冠したコンサートを開催(4/19, 7/21, 10/13)。アマチュアながら日本人作品の紹介に貢献多大なオーケストラ・ニッポニカが、芥川を特集したコンサート(4/27)を限りに休止状態に入るというニュースもあった。旧奏楽堂での企画展と、その中での作品個展(11/15)も開催された。福士はチェリストの山澤慧が福士作品を中核に据えたコンサートを開催(11/11)、未初演の初期ピアノソロ作品が披露される会もあった(瀬川裕美子12/6)。細川作品の演奏機会は多いが、7作目にして初めての国内委嘱となるオペラ、《ナターシャ》(8/11~8/17)の新国立劇場での初演は特筆されよう。南は合唱作品による個展(11/30)が予定されていたが、本年(7/12)へと延期となった。藤枝守は、植物文様シリーズ(3/17)、珊瑚ガムラン(10/24, 11/16)などで、存在感を示した。権代敦彦は、尾高賞を受賞し、N響のMusic Tomorrow 2025(6/26)にて受賞作が披露され、加藤訓子ら(9/20)や谷口知聡(11/7)による個展も開催された。

例年、本欄でご紹介している、現代音楽関連行事をまとめた、「現代音楽イベントカレンダー」では、昨年一年で477件が登録されている。これはあくまで首都圏に限っての話で、コンポーザー・イン・レジデンス制をもつ名フィルや、二回目となった金沢実験音楽祭(3/5~3/9)のような、地方での意欲的な取組は洩れている。それでもこの数である。評者が全てを網羅することは物理的にも不可能なのだが、幾つかを選んでご紹介してみよう。

オペラでは、前述の細川俊夫《ナターシャ》の他、木下牧子《陰陽師》(東京室内歌劇場1/31~2/2)、酒井健治《平家物語~平清盛~》(10/4, 10/5)、オーケストラ公演では、夏田昌和などスペクトル系の作品を集めた都響(4/30)、土屋雄、山本純ノ介、平井正志、佐藤聡明を初演した日フィル(7/11, 7/12)、石黒晶が演奏された「オーケストラ・プロジェクト」(12/3)などがあり、作曲家の個展(に類するコンサート)としては、今堀拓也(1/29)、坂東祐大

(2/22), 間宮芳生 (5/13), 平山智 (6/8), 塚本瑛子 (8/1), 近藤浩平 (8/16), 「ひだまつり」と題された飛田泰三 (9/20, 9/21), 東京オペラシティ文化財団による西村朗 (9/24), ギタリスト土橋庸人のリサイタルとして開催された渡辺俊哉 (10/30), ピアニストの川畑哲佳による木下正道 (11/1), アンサンブル・コンテンポラリーαによる湯浅譲二 (11/12), 佐原詩音 (12/23), 田辺恒弥 (12/24), フィディアス・トリオによる山本裕之 (12/26) などがあった。

邦人への新作委嘱の常連的な個人、団体のコンサートとしては、橋本晋哉がリサイタルで小倉美春 (2/26)。ピアニストでもある小倉美春は、コンテンポラリー・デュオ (3/5)。「新しい耳」(3/9), 東京オペラシティでのB→C公演 (6/10), 東京現音計画 (12/12) で、作曲・演奏・制作のそれぞれで存在感を示した。低音デュオが(定期)演奏会で川上統, 安野太郎, 山田奈直 (4/23), ヴォクスマーナが池田拓実, 斉木由美, 伊左治直 (3/22), 三輪真弘, 福士則夫, 伊左治直 (10/30), 混声合唱団 空が大熊夏織 (6/1), 會田瑞樹がリサイタルで八村義夫に絡めた自作と藤枝守 (10/3), 高橋アキがやはりリサイタルで桑原ゆう (10/8) などが挙げられよう。

演奏面でとりわけ感銘を受けたのは、邦人作品ではないが、東京オペラシティ・コンポーザムでの、ゲオルク・フリードリヒ・ハースの2作品 (5/22)。微分音を駆使した管弦楽作品が。あれほどの精度で表現されるならば、邦人新作初演の世界も変わるだろう。また、サントリーホールでのサマーフェスティバルでの、ドナシエンヌ・ミシェル＝ダンサクによるジョルジュ・アベルギス《レシタシオン》(8/30) も、その演奏の精度の高さに驚かされ、こうした海外の突出した才能を、日本で紹介することは、超円安の逆風下であるが、まだまだ必要と痛感させられた。

コンクール関連では、ゲオルク・フリードリヒ・ハースが審査員をつとめた武満徹作曲賞 (5/25) では、我妻英と金田望が、一位を分け合い、サントリー芥川也寸志作曲賞は、松本淳一, 廣庭賢里, 斎藤拓真が賞を競い、松本が受賞。この場で初演された二年前の受賞者：向井航への委嘱作品も大いに話題となった。日本音楽コンクール作曲部門は、室内楽作品対象の年回りで、非公開の演奏選考の結果、徳田旭昭が1位、日本現代音楽協会が贈賞する現音新人賞は、公開選考 (12/3) の結果、浦野真珠が受賞した。浦野は、松平頼暁の遺贈によって設立された、特に優れた成果に対して授与される「松平頼暁賞」の最初の受賞者ともなった。

また、藤井一興 (1/18), 松永通温 (4/2), 刀根康尚 (5/12), 藤原義久 (6/3), 棚田文紀 (6/24) が他界し、海外からは、ソフィア・グバイドゥーリナ (3/13), ペーター・アブリンガー (4/17), ペア・ノアゴー (5/28発表), ラロ・シフリン (6/26), ダニエル・レンツ (7/25), ロディオン・シチェドリソフ (8/29), ジャン＝クロード・エロワ (11/19) の訃報も届いた。

石塚潤一 (いしづか・じゅんいち)

1969年、東京都生まれ。東京都立大学理学研究科修士課程修了(物理学)。2003年、柴田南雄音楽評論賞奨励賞を受賞。以後、音楽批評家。同時代音楽を中心にクラシック音楽、映画の批評なども行う。読売新聞、音楽の友、音楽現代、ユリイカ別冊などに寄稿。国立音楽大学、福井大学等で現代作曲家、音楽批評について講演。2008年より、コンサートの制作を行う。企画団体TRANSIENT代表、CIRCUIT同人。たまに頼まれ、作曲家や演奏家の写真を撮影する。

評論

宮沢 昭男

21世紀が四半世紀を過ぎた。生成AIが本格稼働し、せっかく身に付けた技術も、分野によってはあっさりAIが取って代わる。芸術音楽の共有に、伝統的な音楽から新作品まで、今までどおりでよいのか戸惑う。ましてAI時代に生まれ育つ新しい世代の感性は、計り知れない。いずれにしても音楽の創造と表現は、確実に多様化する。

一方、世界の指導者たちも、AIを前に手をこまぬくわけがない。AI軍拡競争、情報操作、文化の制度的統制を繰り返すのは歴史の必然。ちょうど100年前、わが国の情報革命の一つ、ラジオ放送が開局した。開戦直後ラジオ電波に乗せて、リヒャルト・シュトラウスの「祝典曲」が日独を結び、同盟関係を強化する。結果、日本は人類史的な悲劇を2度体験した。技術は国家権力の性質により、機能が変わる。

私たち世界市民の手には、良識と国境を軽々越える音楽の2つがある。多様化する音楽表現を丁寧に言語化し、共有可能な地図を描く。そして、技術革新に揺れ動く価値観の中で、芸術の意味と倫理を問い続ける。芸術の自由のために、音楽評論の果たす役割は決して小さくない、と私は考える。

パンデミックを経て、音楽家と主催者はプログラムを刷新した。また同じプログラムでも、表現の様式を大きく変えた。後者の場合、一般の聴衆・観衆も含め、受け手の間に批評性を欠く例が少なくなかった。だが音楽家は手を緩めない。批評媒体も徐々に変化し始めた。背景に執筆陣の若返りもあるのだろう。

以上の視点から、2025年の評論を俯瞰する。

『音楽の友』2月号は、新国立劇場ロッシーニ『ウィリアム・テル』(前年11月)公演評を掲載した。テーマは愛と自由。岸純信は、ヤニス・コッコス演出の鍵を、舞台の巨大な2種類の矢印型オブジェに読み解く。支配者層による人権蹂躪の圧力は空から、民衆の悪代官への憤りは、下から上に具象化し、視覚化された、と。現実を捉えるロッシーニの目を実に生々しく描く。欧州では元来、オペラも歴史を動かす歯車だったと再認識させた。

2月には2つの『カルメン』が従来の殻を破った。東京二期会イリーナ・ブルック演出の舞台は、近未来。設定の趣旨が分かりづらいなか、「社会問題も想起させる“苦み”」とした(加藤浩子、『音楽の友』4月号)。評者のより掘り下げた踏み込みがあれば望ましいだろう。

新国立劇場アレックス・オリエ演出『カルメン』再演も異色だ。現代日本のアリーナに設定する。「キリスト教の縛りと奔放なロマ族の対立」。「日本のタテ社会と国際アーティスト、アスリートの自由な世界のヨコ構造との対比」と読み解く(池田卓夫、『同』同号)。焦点を提示する評者の誠実な姿勢が見て取れる。

7月東京交響楽団定期は、ジョナサン・ノット音楽監督指揮、ブリテン「戦争レクイエム」だった。ラテン語のレクイエム典礼文に自国英語の反戦詩を加えた作品だ。批評媒体はいずれも、現実の世界を見据えた公演評を掲げ心に響く。

「ブリテンの筋金入りの反戦主義」と、「一向に終わらない戦争」(伊東信宏、『朝日』7/31)。「現実の殺戮に祈る虚しさ」。「戦争の時代に…自分は人間たらんと平和を祈りたい」(齋藤俊夫、『メルキュール・デザール』8/15)。無力さを感じながらも、人の生き方を再確認させる言葉が読み手の倫理観を正す。

8月新国立劇場・新制作初演『ナターシャ』は、戦後日本の音楽文化の新たな到達点を示した。『メルキュール・デザール』9/15配信は、批評を複数掲載した。7つの地獄を現代の「吊鐘」ととらえ、「我々はいかに『自らが対峙している地獄』を生き抜くべきか」考えさせた(齋藤俊夫)。「単に世界の悲惨を嘆く贅沢な身ぶり」ではなく、「人間の種としての可能性を力業で垣間見せる〈傑作〉」(内野儀)。

山崎浩太郎(『日経』9/11付)は、絶望的状況下「異なる言語の共存と相互理解と親愛が、作品の大きなテーマとなる」。「地獄とは、人間の醜い強欲と傲慢、その結果の自然破壊」。

作品の底流に、芸術監督/指揮・大野和士、台本・多和田葉子、作曲・細川俊夫の世代共通の問題意識が横たわる。

続く11月には、大野芸術監督はベルク『ヴェッツェック』新制作初演も指揮した。森岡実穂は、「傑作の持つ現代性を見事に描き出した」。「強者から弱者への暴力、そして貧困のもたらす精神の疲弊を描き出す」。「貧困と格差が拡大しつつある2025年の世界に重く響く」(『しんぶん赤旗』12/12付)。

今や日本も、音楽家、享受する側ともに、芸術から過去だけでなく、現在を読み解き、未来に思いをはせる感性にあふれている。クラシック音楽観が変化しているのは明らかだ。

昨年も触れたが、文科省は今なお学習指導要領指針に、19世紀のハンスリック著『音楽美論』をすえる。ハンスリックは音楽を形式としてとらえ、上記21世紀の音楽状況をとらえきれない。見直す時期ではないだろうか。今世紀にふさわしい音楽観が望まれる。

注目の書籍も並んだ。3冊取り上げたい。

井上登喜子著『オーケストラと日本人』（アルテスパブリッシング刊）は、日本のオーケストラ文化100年を総括した。労作だ。昭和戦前期は旧制大学学生オーケストラ、戦前・戦後はプロオケ、20世紀から今世紀にかけ、海外を含む3団体をデータ化した。膨大な演奏会データをもとに、次の2つを実証的に分析した。日本のオーケストラが「レパートリー作品」と、権威的な作品としての「正典」をいかに作り上げたか。

そして現在のオーケストラ事情を、プログラムの停滞と、固定客の高齢化問題として把握する。社会学者ブルデューの「象徴資本」概念を取り入れ、突破口を探る。「レパートリー作品」「正典」のほかに、同時代の音、時代の声を聴く視点が加わると、日本人の感性はさらに鮮明になるだろう。

亀山郁夫著『ショスタコーヴィチを語る—亀山郁夫対談集』（岩波書店）。わが国の論客が興味深い対話を繰り広げた。当該作曲家の評価は生前から二分し、ヴォルコフ著『証言』が出ると作品解釈は大きく変わった。芸術家の二重性が話題になる。作曲者の本音やスターリン批判を鮮明にし、議論を先に進めた。亀山のテーマ、ロシア・アヴァンギャルドに継ぐ全体主義時代の文化論研究の対象に位置付けた。昨今のショスタコーヴィッチ人気は、現代の閉塞感が彼の体験と重なるのだろう。

田邊稔著『田邊稔の日本フィル物語』（ポトス出版）。著者は2つのオーケストラ倒産を体験した。問題意識は楽団活動の継続維持である。1972年の日本フィルハーモニー交響楽団解散と分裂を教訓に、問題を社会化し“解剖学的”に取り組んだ。そして、オーケストラが文化として根を張るには、演奏技術だけではない。オーケストラのインフラ整備に音楽家が自ら参加し、社会に発信する必要を説いた。

宮沢昭男（みやざわ・あきお）

1955年生まれ。社会学修士。1987-88年ベルリン・フンボルト大学留学、芸術学部Dr.C・カーデンの下で音楽社会学を研究。1992年、法政大学大学院社会科学研究所社会学専攻博士課程単位取得退学。「A・ドヴォルジャークの音楽における民族主義」（関東社会学会第4号1991年）。S・ラッシュ『ポスト・モダニティの社会学』共訳（法政大学出版会、1997年）。“Sonnenaufgang? Die Situation der japanischen Orchester” in Das Orchester 2003。ミュージック・ベンクラブ・ジャパン会員 三菱UFJ信託芸術文化財団・理事

音楽映像メディア (CD&DVD)

山崎 浩太郎

・新譜の発売点数

日本レコード協会のサイト掲載の「新譜数推移」(<https://www.riaj.or.jp/f/data/others/sp.html>)の2025年の項によると、所属の正会員、準会員、賛助会員計66社の2024年発売の新譜のなかで、クラシック音楽は12cmCDの邦盤4,397のうち58、洋盤2,164のうち646、合計すると6,561のうち704で、全体の約10%を占めた。2024年は6,502のうち852と約13%だったので、新譜点数も全体に占める割合も減少したが、2023年とはほぼ同じなので、点数も割合も、このあたりが現代日本の音楽業界におけるクラシックの12cmCDの平均値なのだろう。

またレコード店のHMV&BOOKS onlineのサイトでは、2025年のCD、SACD、DVD、ブルーレイ・ディスク、LPの発売数を見ることができる(https://www.hmv.co.jp/search/adv_1/genre_VARIOUS_700/keyword_the/year_2025/)。HMVが取り扱っていないディスクもあるので概数となるが、クラシックの総数は約4,440。うち国内盤は約1,050で、輸入盤がその3.2倍の約3,380となる。そのうちCD約3,380、SACD約250、DVD約80、ブルーレイ・ディスク約78、LP約190。総数は昨年が約5,600だったので、約2割減少した。

・日本のアーティストのCD

レコード店のタワーレコードのサイトにある「2025年タワーレコード クラシカル年間TOP40」(<https://tower.jp/article/campaign/2025/12/05/04?kid=plkpcmtmp02>)を見ると、2025年に人気のあったクラシックCDがどんなものか、概要を知ることができる。

国内盤の「クラシック 話題盤 TOP10」では、角野隼斗が2年連続で1位を獲得し、その人気ぶりを見せつけた。1位を得たのはブルーレイ・ディスクの「ピアノ・リサイタル at 日本武道館」(SONY Classical)で、クラシックのピアニストが13,000人のファンでこの会場を満席にした2024年のリサイタルの記録映像だ。構成にも選曲にも映像にも工夫をこらして、会場のファンもディスクの視聴者も楽しませようという精神が徹底しており、新時代のピアニスト像の一つを見ることができる。

ピアニストでは、辻井伸行の名門ドイツ・グラモフォン・レーベルからのデビュー・アルバム、ベートーヴェンのピ

アノ・ソナタ第29番《ハンマークラヴィーア》他の1枚も6位に入った。また角野に続くYouTuberピアニストとして人気を集める「たくおん」こと石井琢磨の、ハンスイェルク・シェレンベルガー指揮のベルリン交響楽団と共演した「シューマン・ザ・ベスト」(SONY Classical)が4位となり、ピアニスト人気は「音楽・映像メディア」分野でも熱い広がりを見せている。

指揮者では、2位にサイトウ・キネン・オーケストラとの「ブラームス：交響曲第1番&第2番」(Decca)、10位に京都市交響楽団との「R.シュトラウス：交響詩《英雄の生涯》」(日本コロムビア)の2点が入った沖澤のどかの存在が突出している。女性指揮者がこれだけの人気を集めるのは素晴らしいことだし、今後も性別の枠にとらわれない、国際的な活躍を期待させる。

また指揮者で目をひくのは、7位に山本直純が新日本フィルハーモニー交響楽団を指揮した1972~2000年のライブ録音集5枚組(Tobu Recordings)がランクインしたこと。ベートーヴェンの《合唱》やブラームスの交響曲第1番を聴けることで、シリアスなクラシックの指揮者としては正當に評価されにくかった山本直純の再評価のきっかけになりそうなセットが人気を集めたのは嬉しい。同様に昭和を中心に活躍した音楽家では、生誕100年を迎えた芥川也寸志の作品や指揮によるディスクが登場したのも、2025年のトピックだった。

タワーレコードのリストには入っていないが、大物のセットでは2024年に没した小澤征爾の商業録音のほぼすべてを集大成した「小澤征爾エディション」(ユニバーサルミュージック)も話題となった。レーベルの枠を超え、放送用の初登場音源も加えたCD238枚組、税込25万円という破格のボックスは、日本では小澤征爾にしか実現できない規模だろう。

・海外のアーティストのCD

タワーレコードのサイト内「クラシック輸入盤TOP40」で1位を獲得したのは、2度の来日公演でも話題をさらった指揮者のクラウス・マケラによる、パリ管弦楽団とのベルリオーズの幻想交響曲(Decca)。ほかにロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団とのマーラーの《千人の交響曲》も11月に国内盤で発売された。海外では配信のみの録音を、日

本と韓国だけではディスク化する現象も興味深い。

輸入盤では、国内盤の男性ピアニスト人気と照応するように、2位にアリス=紗良・オット (DG)、3位に小林愛実 (ワーナー)、4位にユジャ・ワン (DG) と女性ピアニストが上位を占めた。なお、ユジャのディスクはアンドリス・ネルソンス指揮のボストン交響楽団と共演したショスタコーヴィチのピアノ協奏曲集だが、このほかにこの録音を含めてショスタコーヴィチの交響曲全集と協奏曲集をまとめたネルソンス指揮ボストン響による19枚組のボックス (DG) も、枚数に比して低価格で発売され、TOP40に入らなかったとはいえ話題を集めた。ネルソンスは9位のボストン響とのメシアンのとゥランガリーラ交響曲など複数の新譜が好調で、メジャー・レーベルでのメジャー・オーケストラの新録音や映像が少なくなった現代において、ひとり気を吐く存在となっている。

・キングインターナショナルの営業終了

2025年の「音楽・映像メディア」界の話題としては、ディスクのディストリビューター、キングインターナショナルの営業終了も忘れてはならない。

キングレコードの子会社として1995年に設立された同社は、ハルモニア・ムンディやオルフェオ、BIS、アリア・ヴォックス、ヘンスラー、ベルリン・フィル自主レーベルなど、多数の海外レーベルの輸入卸に加えて、アルトゥスやオーパス蔵など日本のさまざまなマイナー・レーベルも配給し、潤沢に流通させた。輸入盤に日本語解説をつけた国内盤化も積極的に行ない、音楽之友社主催の「レコード・アカデミー賞」でも多くのディスクが受賞の栄に浴してきた。その同社の廃業は、ソフト業界の時代の変化を実感させる、悲しいトピックである。

山崎浩太郎 (やまざき・こうたろう)

演奏家の活動と録音をその生涯や同時代の社会状況において捉えなおし、歴史物語として説く「演奏史譚」を専門とする。クラシック音楽専門誌各誌や各種サイトに寄稿。朝日カルチャーセンター新宿教室にてクラシック音楽の講座を担当している。著書は『演奏史譚1954/55』『クラシック・ヒストリカル108』(アルファベータ)、片山杜秀さんとの『平成音楽史』(アルテスパブリッシング)ほか。1963年東京生まれ。

各地の音楽活動

●北海道

八木 幸三

札幌交響楽団の首席指揮者となったE・グランディが就任記念として、大曲であるマーラー／交響曲第2番「復活」を渾身のタクトでドライブ(4月定期)。グランディは「復活」というより「危機を乗り越える」ことがテーマとプレトークで語り、まさに混沌とする今の世界情勢の中で、前途に希望を感じさせる一夜となった。グランディは4月新・定期hitaruシリーズで、ベートーヴェン／交響曲第7番を両翼配置による立体感のある精緻なアンサンブルと清新なフレーズ感で聴かせた。さらに彼は、6月定期でR・シュトラウス／交響詩「ドン・キホーテ」とラヴェル／ダフニスとクロエにより、色彩豊かな管弦楽の醍醐味を味わわせてくれた。正指揮者、川瀬賢太郎は、3月新・定期で宮田大を独奏に迎えての菅野祐悟／チェロ協奏曲「十六夜」を宮田の情感たっぷりに歌い上げるチェロと管弦楽の静謐で幻想的な背景で月夜の神秘性を醸し出した。「祈り」をテーマにした11月定期では2曲の邦人作品と大編成のストラヴィンスキー／春の祭典を端正にまとめ上げていた。友情指揮者広上淳一は、武満徹／「乱」組曲と外山啓介の打楽器のようなピアノを伴った伊福部昭／リトミカ・オスティナタで重厚感のある響きを放ち(1月定期)、12月新・定期では米元響子を独奏者に迎え、尾高惇忠／ヴァイオリン協奏曲を静謐な第1楽章から扇情的なフレーズを描く第3楽章までを豪快に奏でた。前首席指揮者M・バーメルトは2月定期でモーツァルト／グラン・パルティータを13名の団員により典雅に奏で、ブラームス／交響曲第3番も彼らしく弱奏部での緻密な音の積み重ねを基盤としながら雄大な楽想を表出させた。首席客演指揮者の下野竜也は、名匠A・ケフェレックと共にベートーヴェン／ピアノ協奏曲第4番に内在するロマン性を正攻法で表出させ、ケフェレックの優しく優雅な音色から彼女の世界観に惹きつけられた。他の客演指揮者では、86歳にして益々旺盛な音楽活動を展開するH・ホリガーが、ケルターボーン／オーボエと弦楽のための変奏曲を吹き振りし、オーボエのレジェンドらしい音色が強烈な印象を与えた。ウィーン・フィルのコンサートマスターF・シュトイデも弾き振りでモーツァルト／ヴァイオリン協奏曲第5番を巧みなボウイングで紡いだ。

パシフィック・ミュージック・フェスティバル札幌(PMF)は、世界23カ国・地域1345人の応募者から選ばれた95人のアカデミー生によるPMFオーケストラが、オープニング・ナイトで、この国際教育音楽祭の提唱者バーンスタインの「キャン

ディード」序曲を華やかに演奏。13年前にコンダクティング・アカデミー生としてPMFに参加したK・カネラキスが快活なタクトでオケを牽引した。同オケはカネラキスの指揮で、五明佳廉を独奏者に迎えてのシベリウス／ヴァイオリン協奏曲とウィーン・フィルとベルリン・フィル教授陣を含めた大編成オケによるマーラー／交響曲第1番「巨人」を壮麗に奏でた。五明佳廉は小菅優とデュオリサイタルも開催。モーツァルト／ヴァイオリン・ソナタ第35番では小菅の粒立ちの良いピアノを背景に、五明の艶のある音色が伸びやかにアダージョ楽章を歌い上げていた。35回目のPMFを記念し、国内外で活躍するPMF修了生が集まった室内管弦楽団による演奏会を開催。コンサートマスターに何度かPMFに登場している郷古廉、指揮もPMF修了生のD・ルンツが担い、ペンデレツキ作品やルトスワフスキ／クラリネットとアンサンブルのための舞踏前奏曲などが演奏された。ルンツはホストシティ・オーケストラである札幌と共演。ショスタコーヴィチ／交響曲第10番では、PMFアメリカ教授陣とアカデミー生も加わった大編成オケの醍醐味が楽しめた。教授陣による3つの室内楽コンサートでは、R・キュッヒルらウィーン・フィルの現役・OB団員によるシューベルト／弦楽四重奏曲第15番やA・ブラウらベルリン・フィル団員によるダンツィ／木管五重奏曲、さらにアメリカ主要管弦楽団員によるR・シュトラウス／交響詩「ティル・オイレンシュピーゲル」の管弦5重奏版などが聴けた。PMFの総決算とも言えるGALAコンサートは、巨匠M・ヤノフスキを首席指揮者に迎え、ドイツ音楽の神髄をPMFオーケストラから引き出した。R・シュトラウス／交響詩「死と変容」では、PMF教授陣も加わる大編成オケによって、人間の魂が苦悩を越えて浄化されるという崇高なテーマが堂々と謳い上げられていた。

道内オペラ界では、札幌文化芸術劇場hitaruオペラプロジェクトの第2弾として道内出身キャストを中心に『ドン・ジョバンニ』全2幕を上演した。タイトルロールの栗原峻希をはじめ地元勢として、針生美智子(アンナ)と倉岡陽都美(エルヴィーラ)が対照的な声質で熱演。岡元敦司(レポレロ)は、抜群の演技力で物語を力強く牽引した。栗國淳の演出は、奇をてらわぬ正攻法で音楽をじっくりと聴かせ、指揮の園田隆一郎は、自らフォルテピアノを奏で、レチタティーヴォなど自然の流れで出演者の演技を際立たせていた。北海道二期会は「女はみんなこうしたもの」

vol.2と題し、岩田達宗の演出で名作オペラを通し、様々な愛のかたちを公演。4タイトルのオペラの中で4重唱が3曲歌われるなど、客席を含めホール全体を使って生の歌声が飛び交う立体感が楽しめた。北海道実験劇場は、『土方歳三～炎の生涯～』と題し、土方の波乱に満ちた半生を原作・広瀬るみ、作曲・二橋潤一、台本・塚田康弘という道内在住者がオペラ化。全3幕、約3時間に及ぶ道産創作オペラとして発信した。

声楽ではオペラや宗教曲など幅広く活躍する北海道鷹栖町出身の中江早希が日本歌曲とドイツ歌曲によるリサイタルをおこない、LCアルモーニカ代表の南出薫が、15年ぶりのリサイタルで『修道女アンジェリカ』から“母もなく”を我が子への深い愛と悲しみを込めて切々と歌い上げた。北欧歌曲の第一人者として、またオペラでも豊富な経験を持つ道教育大教授大久保光哉が、邦人作曲家作品によるリサイタルを開催。さらに札幌大谷大学教授三山博司がブリテン作品などで清澄なテノールを聴かせた。

ピアノでは道教育大准教授二宮英美歌が、フランス現代作品や彼女の夫である作曲家二宮毅の「秋之三夜」を世界初演。音を極限にまで削ぎ落とし、洗練された音の連なりが「竹取物語」のかぐや姫昇天を静謐な空気感で描いていた。大宮理がバッハ／ゴルトベルク変奏曲を自身が所有する堀米蔵製作のチェンバロで全曲演奏し、古稀を越えた奏者とは思えない若々しさで、抜群の響きと豊かな音色を聴かせた。

室内楽では道教育大教授で、山田和樹率いる横浜シンフォニエッタのコンサートマスターも務める長岡聡季が、藝大フィルハーモニア管弦楽団首席ビオラ奏者吉田篤を伴ってモーツァルト／二重奏曲などを快演。札幌コンサートホールと札幌音楽家協会の共催による「札幌の音彩(ねいろ)Ⅱ」が、札幌出身の指揮者横山奏を迎えて、同協会女声合唱団と室内管弦楽団により市内在住の作曲家南聡の合唱作品やモーツァルトの交響曲を流麗に演奏。山本泰子、溝田令の二人のヴァイオリニストを中心に編成された弦楽合奏では、ヴィヴァルディとバッハの「2つのヴァイオリンのための協奏曲」が演奏され、二人の対照的な音色で軽妙なカノン風の掛け合いなどが楽しめた。札幌出身の作曲家でピアニストの石垣絢子は、書道とのコラボによるユニークな企画で、札幌のヴァイオリニスト佐藤郁子を伴って自作自演の作品展をおこなった。ウクライナ出身のチェリスト、トラブロワが、札幌コンサートマスターの田島高宏と妻でピアニストの田島ゆみと共に、ウクライナ人作曲家の室内楽作品で平和への思いを音楽で伝えた。

八木幸三（やぎ・こうぞう）

北海道教育大学特設音楽課程卒業。管弦楽・合唱・室内楽・吹奏楽・ミュージカル作品などを多数作曲。札幌市新人音楽会作曲部門、英国エディンバラ音楽祭、ブタベスト現代音楽祭などで作品発表。歌劇『ノンノ』、館野泉監修左手のためのピアノ作品など作曲。北海道新聞、音楽専門誌「音楽現代」で音楽会評執筆。北の聲アート奨励賞、札幌文化奨励賞、札幌芸術賞などを受賞。北海道作曲家協会会長を歴任。現在札幌音楽家協議会会長。

●東北

正木 裕美

2025年、東北においては仙台国際音楽コンクールの開催や多地域を結ぶ文化圏の形成など、一層と活気や広がりが見え立ってきた。音楽家や文化事業の作り手の熱意が、地域の文化圏に限らず、他地域からの来演や交流を盛んにしている。

国内外から多くの演奏家や未来の担い手が来仙した仙台国際音楽コンクールは、5月24日から6月29日まで日立システムズホール仙台で開催された。先行するヴァイオリン(vn)部門では出場申込者193名より37名が予選に進み、最高位は第2位のムン・ボハ(韓国・19歳)が受賞。第3位のジャン・アオジュ(中国・17歳)ほか、6位までの入賞者全員が韓国・中国出身者となり、アジア勢の充実ぶりが顕著に表れた。また「協奏曲コンクール」の異名のとおり予選以降はオーケストラとの協演力が試されるが、今回、同部門では全ラウンドでモーツァルトが課されたことを特筆しておきたい。審査委員長は堀米ゆず子が続投し、堀正文、ボリス・ベルキン、寺神戸亮ら計11名の演奏家が審査を担った。

ピアノ(p)部門へは445名の応募があり、会場における予選へは32名が出場。野平一郎審査委員長の「(予備審査は)前回以上に技術的に高い水準」との言葉どおり熱演が続き、入賞者は第1位=エリザヴェータ・ウクラインスカヤ(ロシア・28歳)、第2位=アレクサンドル・クリュチコ(同・24歳)、第3位=天野薫(日本・11歳)ほか、ヨーロッパと日本勢が占めた。3位までの受賞者はいずれも自国の作品でファイナルに挑んだが、天野による矢代秋雄のピアノ協奏曲は小学生ながら高いレベルに達し、最年少での受賞となった。なお、審査委員は野平以下、海老彰子、ジャック・ルヴィエ、ダン・タイ・ソンら計11名。vn部門では広上淳一が、p部門では高関健が指揮を務め、仙台フィルハーモニー管弦楽団と山形交響楽団(vn部門予選)がコンテストに寄り添った。

その仙台フィルは、コンクール直前に東京公演を行い(5/21 サントリーホール=広上淳一指揮)、マーラーの交響曲第1番ほかでオーケストラの「今」を紡いだ。定期演奏会は、常任指揮者の高関健と太田弦ら同フィル指揮者陣が、ホルスト「惑星」(1月 日立システムズホール仙台)、スメタナ「我が祖国」(2月)、芥川也寸志:交響曲第1番ほか(4、9月)、そしてショスタコーヴィチ:同第15番(5月)等、記念イヤーの作曲家を軸に展開。時節に適ったプログラム

で、作品やオーケストラの慣習を洗いなおすような音楽作りが透徹していた。また、アンドレアス・オッテンザマーによるR・シュトラウス(7月)、ユベール・スダーンを招いたモーツァルト&シューベルト(11月)では指揮者の持ち味が豊かに香り、名手・金川真弓の圧倒的的技巧によるバルトークのヴァイオリン協奏曲第2番(9月)、ベルリン・フィル・デビューを飾った山田和樹のストラヴィンスキー3大バレエ「火の鳥」「ペトルーシュカ」「春の祭典」(特別演奏会 11/15 東京エレクトロンホール宮城)等、海外(在住)アーティストらの来演も、高水準の演奏に繋がった。24年に始動した水曜昼下がりシリーズ「名曲トラベル」も引き続き好調。ベテランの首席奏者陣に加え、西口真央(fg)や紺野駿人(tb)、浦田誠真(tp)ら若い首席奏者陣の活躍も、オーケストラに良い刺激をもたらしている。

一方、山響は7年目を迎えた常任指揮者・阪哲朗のもとオペラや声楽曲で存在感を示し、ミュージック・パートナーのラデク・バボラークやオッコ・カムとの良質な音楽が話題を呼んでいる。この1年で阪が手掛けたオペラ・声楽曲は米沢公演における佐藤敏直の交響讃歌「やまがた」抜粋(1/13 伝国の杜置賜文化ホール)、演奏会形式によるブッチーニ「トスカ」(特別演奏会 2/2 やまぎん県民ホール)、メンデルスゾーン「夏の夜の夢」(4月定期 山形テルサ)、そして佐藤真「大地讃頌」(5/18 村山市民会館)の4公演。とりわけ「トスカ」では音楽の細部に寄り添うような阪の構築に演技巧者の森谷真理(トスカ)、宮里直樹(カヴァラドッシ)らの歌唱が映え、オーケストラもまた、機微良く応えた。また2018年、24年の共演を経て関係性を深めるカムとは、十八番のシベリウスに取り組んだ。6月定期における「レンミンカイネン」、東京や大阪公演におけるオール・シベリウス・プロ(6/19 東京オペラシティコンサートホール、6/20 ザ・シンフォニーホール)と、同響のシベリウス音楽における伝統に白眉ならでの解釈を刻み込んでいる。またバボラークは自身のアンサンブルを率いて、モーツァルトのホルン交響曲第1番やハイドンによる2つのホルンのための協奏曲を披露(11月定期)。豊麗なホルンの響きとともに、表情に富む音楽を作り上げた。

山響は山形市外にも着実に文化圏を広げ、前述の米沢(別途8/23にも開催=キンボー・イシイ)や村山公演のほか、酒田、鶴岡における庄内定期演奏会(3/1 酒田市民会館希

望ホール=広上淳一, 7/21 荘銀タクト鶴岡=ユベール・スダーン), そしてオーケストラ・キャラバンを機に秋田県の横手市民会館でも公演を実施(12/27=坂入健司郎)。山形を象徴する文化交流の仲介役, 社会装置としての自負を持ち, 地域に貢献している。

音楽祭もまた人流を生み出し, 交流を盛んにしている。25年は延べ3万1,960名が来場した東北最大規模の仙台クラシックフェスティバル(10/3~5 仙台市内各会場)ほか, 小山実稚恵が主宰する「こどもの夢ひろば ポレロ」(8/2・3 日立システムズホール仙台), 「八戸イカール国際音楽祭」(8/14~19 SG GROUPホールはちのへ, ほか)等が開催された。また青森県出身の沖澤のどかを芸術監督に, 「青い海と森の音楽祭」が新たな一歩を踏み出した(6/30~7/6)。隠岐彩夏(S)や横山幸雄(p)ほか中核メンバーも充実し, とりわけこのために結成されたアオモリ・フェスティバル・オーケストラは, コンサートマスターの矢部達哉以下, 小川響子(vn), 北田千尋(vn), 鈴木康浩(va), 佐藤晴真(vc), 西沢澄博(ob), 山川永太郎(tp)ほか腕利きの気鋭やプロ・オケの首席陣が居並ぶ。「故郷青森に素晴らしい音楽をもっと届けたい」との沖澤の想いが結実し, 充実のスタートを切った。

最後に室内楽やアンサンブル, ソロ公演を駆け足で振り返りたい。山形では山響メンバーらが山形県郷土館文翔館, 日本基督教団山形六日町教会や囃館(はなしごや)といった歴史的建造物や聴き手と密に音楽を共有できる文化拠点において, ソロや室内楽公演を展開した。また仙台では仙台フィルの吉岡知広(vc)が主宰する「イズミノオト」や, 三宅進(vc), 西沢澄博(ob), 助川龍(cb)らが監修やプランニングを務める「Music from PaToNa」が好評を博している。パトナのシリーズは仙台フィルのメンバーに加え来演するアーティストの幅も一段と広がりを見せ, また学生を対象にアンサンブルのアカデミーを無料で開催&公開し, 若手への支援も継続中。弾き(吹き)手との交流が, 音楽界の裾野を広げる一助となっている。

なお, 山響創立名誉指揮者の村川千秋が鬼籍に入った。1972年に同響を設立する以前から最後のステージとなった村山公演(5/18)まで, 当地の音楽文化に寄与し続けた村川を偲び, 山響は追悼コンサート(11/9 山形市民会館)を聞いた。その功績への深い敬意とともに, 哀悼の意を捧げたい。

正木裕美(まさき・ひろみ)

クラシック音楽専門誌「音楽の友」編集部を経て, 現在, 毎日クラシックナビ編集/音楽ジャーナリスト。芸術文化振興基金運営委員会舞台芸術等部会委員, 音楽専門委員, 文化芸術活動調査員, 仙台市青年文化センター事業評価等歴任。

●北陸

山田 正幸

北陸に一つのプロオーケストラ、オーケストラ・アンサンブル金沢（以下OEK）は石川県立音楽堂を本拠地としている、その邦楽ホール監督に野村萬斎を迎えている。この年は2月（金沢、氷見）萬斎のおもちゃ箱「メンデルスゾーン：『真夏の夜の夢』」狂言とOEKのコラボレーションが行われた。真冬に「真夏の夜の夢」なのだ。シェイクスピア劇にメンデルスゾーンの音楽劇を狂言、琉球舞踊によって上演。日本の伝統音楽とオーケストラが融合した新しい音楽の世界を作ったので有る。合唱は地元の児童合唱団を参加させたことも話題だった。知らず知らず「和洋の響き」に溶け込んだ。

9月石川県立音楽堂定期公演 広上淳一率いるOEKは、今回が日本デビューとなった世界が注目するイスラエル出身の若手ピアニスト、トム・ポローとベートーヴェンの「皇帝」を演奏。創り出す音楽は端正かつエネルギーに満ち溢れ聴衆を魅了した。このプログラムは、金沢のみならず国内各地へ6公演届けられ、いずれも大好評であった。

金沢では5月ゴールデンウィーク期間に北陸・金沢ガルガンチュア音楽祭が今年「世界をつなぐハーモニー」をテーマに行われた。1週間に70回の有料公演、130回の無料公演で街中が音楽に染まった。海外からデンマーク国立フィルハーモニー管弦楽団、ベトナム国立交響楽団、そして地元オーケストラ・アンサンブル金沢で競演が続いた。デンマークフィルはシェーファー指揮でフィンランド、シペリウス:SYM2番等北欧色彩満載。本名徹次指揮ベトナム国立交響楽団には伝統の一弦琴を弾くレ・ジャンと競演ほかエルバシヤとピアノ協奏曲「皇帝」、エルバシヤの音色の繊細さに熱狂。初めて行われたコーラスの祭典では佐藤眞作曲「土の歌」全曲を佐藤眞自身の指揮で歌おうと全国から募集した180名、ベトナム国立響が伴奏するが佐藤眞が体調不良で急遽松井慶太が代役指揮を務めるハプニングあるも会場一帯となって大盛況。

富山県では7月7日 一般社団法人に移行した「とやま音楽文化協会」が自主公演事業を行った。とやま演奏会シリーズ、アンサンブルシリーズ、そして市民音楽フェスティバルで有る。アンサンブルシリーズではOEKのVnトロイ・ゲーギンズ、Vc 富田祥と組んだPf藤井亜里沙のベートーヴェン：ピアノトリオ第5番「幽霊」の爽やかな演奏は話題を呼ぶ。

また富山駅北口前に位置するオーバード・ホール 大ホ

ールは今後2年間の改修工事に為休館する、そのクロージング記念公演が11/15、16日に開催された。「踊れ!第九」で有る。日本ダンスフォーラム賞受賞に輝く森下真樹が演出・振付、ダンスもその仲間達と独自に選ばれた市民ダンサー（24名）が踊ったので有る。指揮辻博之、独唱、合唱団30名は富山にゆかりの有る声楽家達。オーケストラは地元のプロアマ含む特別に編成された「踊れ!第九」管弦楽団である第1楽章から4楽章まで全曲をダンス化したので有る。楽聖の音を視覚で味わえる日が来ようとは！これは贅沢だ！とは指揮者の感想だった。

福井県ではハーモニーホールふくいではロツテルダム・フィルハーモニー管弦楽団公演、沖澤のどか指揮京都市響公演、ピアニスト辻井伸行公演、Himari to Karlis DUO 等等話題になった公演が多い、なかでもsop中田けいがワークショップで実践したパリアフリー公演は貴重で有る、一般の聴衆者と同じように公演を聴けるこのような取組みは全国にも広がる事を期待したい。また地元のアーティストによる「越のルビープロジェクト」も軌道に乗っている。

細川俊夫音楽監督と伊藤恵プロデューサーで行う武生国際音楽祭は34回を迎える。テーマは新旧ウィーン楽派の室内楽である。ベリオ&ブーレーズ生誕100周年記念公演、初参加のsopイレー・スーのシューベルト、シェーンベルク歌声は会場を溢れる響きで魅了した。また作曲ワークショップでは望月京による自作のレクチャーを行い、またチャーリッヒ芸大講師パウマンによる古典の分析による新しい視点に注目。「作曲を通して世界を見る」というテーマで作品を取り上げた。

小浜市文化会館では12/14セントラル愛知響をバックにベートーヴェン第九公演は31回目を迎えると言う歴史を創った小牧伸輔合唱指導者は感慨深いとの感想はなお続く。

山田正幸（やまだ・まさゆき）

昭和40年金沢大学卒。石川県音楽文化振興事業団、ガルガンチュア音楽祭シニアディレクター、全国共同制作オペラプロデューサー、日本劇場・音楽堂等協議会音楽部会顧問、オペラ「禅・ZEN」「滝の白糸」「高野聖」プロデューサー、昭56中日教育賞、昭62珠洲市文化賞、平27石川テレビ賞、平28新日鉄住金音楽特別賞、平30北國文化賞、令元渡邊暁雄基金音楽特別賞、令2金沢市文化賞、令4文化庁長官表彰、ソニー音楽財団評議員

●中部

伊藤 美由紀

愛知県クラシック音楽界での大きなニュースは、愛知4大オーケストラ・フェスティバルの第1回公演が開催されたことである。愛知県下を代表する4つのプロオーケストラである名古屋フィル、中部フィル、セントラル愛知、愛知室内オケによりブラームス全交響曲が8月31日に演奏された。当初、中部フィルの指揮は芸術監督である秋山和慶の予定であったが急逝により竹本泰蔵に変更。他3団体は各々の音楽監督、川瀬賢太郎、角田鋼亮、山下一史による指揮。愛知県芸術劇場コンサートホールは満席で、各々の団体が実力を発揮し質の高い演奏で観客を魅了し、最後の第4番まで観客が減少することなく大成功を収めた。通常の定期演奏会に比べて若年層の観客が多くみられ今後の継続が期待される。

名古屋国際音楽祭のオープニング・ガラ・コンサートは、例年に続き名古屋フィルと川瀬賢太郎を迎えて国際的に活躍する2名の若手ピアニスト、愛知県出身の田所光之マルセルと福岡光太郎とともにピアノ協奏曲に焦点を当てる。7月までに庄司紗矢香（ヴァイオリン）、山田和樹（バーミンガム市交響楽団音楽監督）、HIMARI（ヴァイオリン）を含む国内外で注目の演奏家たちによる全6公演が開催された。

愛知県芸術劇場自主事業では、上述の愛知4大オーケストラ・フェスティバル（8月）を含み、次の4点は現代作品に焦点を当てた個性的でユニークな内容による公演となった。演劇作家・小説家の岡田利規と作曲家の藤倉大のコラボ作品である音楽劇『リビングルームのメタモルフォーシス』（3月）、竹下景子（特別ゲスト）の語りを含み、愛知県出身の八木美知依・作詞作曲による箏、歌、エレクトロニクスを含んだ独自の箏世界を築き上げた『八木美知依・箏の世界・音と声』（11月）、久保田晶子（薩摩琵琶）、丹下聡子（フルート）を迎えて愛知県在住の作曲家3名、伊藤美由紀、水野みか子、倉地佑奈の新作を含んだプログラムによる『ニンフェアル第21回公演「枯淡の美」～薩摩琵琶とフルートによる』（11月）、M.エアハルト（アルパ・ドップア）、小原道雄（チェンバロ）を迎えて、愛知県在住の作曲家・今井智景によるプロジェクト『Crossboundary XIII ～ルネサンス・ハーブの革命「DIMINUTIONS」』（12月）である。例年力を入れているパイプオルガンイベントとしては、オルガニスト養成事業、オルガニストの山田由希子、勝山雅世、小林英之、湯口依子らによる公演を含んだ6イベント。

今年度の名古屋市民芸術祭の音楽部門の参加団体としては、『江頭摩耶（ヴァイオリン）・フィンランドの音楽風景トウオマス・トゥリアーゴを迎えて』、『戸谷誠子ピアノリサイタル』、『トランペッター大和・儂音』、『Duo Aurea・Donna Onna歌曲でたどる女性作曲家の旅』、『レーベインムジーク秋の芸術祭・室内楽で贈るクラシック名曲スペシャルコンサートvol.3』、『ニンフェアル第21回公演・枯淡の美』、『クール・ジョワイエ演奏会』、『吉田文パイプオルガンリサイタル』、『小さなオペラ・木の匙』の名古屋市内で活躍する9団体/個人が選ばれ10-11月に開催された。

名古屋フィル定期『喜怒哀楽』シリーズ、1月は、ロベルト・フォレス・ベセス（指揮）により小出稚子（コンポーザー・イン・レジデンス）／へび（初演）、カミーユトマ（チェロ）によるサン＝サーンス／チェロ協奏曲第1番を含む。川瀬賢太郎によるマーラー／交響曲第6番『悲劇的』（2月）は、同プログラムによる東京公演も完売により大成功を収める。シーズン最後『喜怒哀楽の街』（3月）は、ウェイン・マーシャル（指揮・ピアノ）により得意とするガーシュインに焦点を当てたアメリカプログラム。4月からの新シリーズ『肖像』は、川瀬とともに3名のソリスト角野隼斗（ピアノ）、石若駿（ドラムス）、マーティ・ホロベック（エレキベース）を迎えてジャズの要素を含んだグルダ／コンチェルト・フォー・マイセルフなど、全席完売で開幕。90歳を迎えるジャン＝クロード・カサドシュ（指揮）と孫のトーマス・エンコ（ピアノ）による共演（5月）、6月は広上淳一（指揮）により彼の師である尾高惇忠の作品に焦点を当てる。7月は若手指揮者・エミリア・ホーヴィング、ヨルゲン・ファン・ライエン（トロンボーン）を迎える。川瀬により青木涼子（能声楽）を迎えて小出稚子／JUNCTIONの初演（9月）、トーマス・ダウスゴー（指揮）によるブルックナー／交響曲第8番（10月）、小泉和裕（名誉音楽監督）によるシヨスタコーヴィッチ没後50年記念（11月）、ジェフリー・パターソン（指揮）、上野通明（チェロ）によるミヤスコフスキー／チェロ協奏曲など（12月）と内容の濃い充実した定期が揃った。その他、市民会館名曲シリーズ『ベートーヴェンPLUS』はベートーヴェン交響曲2曲ずつを含んだプログラムにより各指揮者による個性的なプログラムで4公演、子供向けの『こども名曲コンサート』も好評であった。

セントラル愛知定期の今期のテーマは『ロマンティック・

セントラル』。角田鋼亮によるシーズン最初は、周防亮介（ヴァイオリン）を迎えて、コルンゴルド／ヴァイオリン協奏曲ニ長調を含む『ロマン主義の拡張』（4月）、『マーク・マスト（指揮）の“悲愴”』（6月）、宮田大（チェロ）を迎えて『重ねあう想い』（7月）、下野竜也（指揮）による『渾身のブルックナー』（9月）、ニコライ・クズネツォフ（ピアノ）を迎えてハンソン／交響曲第2番を含む『アメリカのロマン主義』（11月）。馴染みのない作品も取り入れながらロマンティックな作品による興味深いシリーズとなった。

中部フィル定期の第100回公演は、1月に逝去した秋山和慶（芸術監督）氏に捧げられた「追憶のアダージェット」をテーマに大植英次（指揮）、北川千紗（ヴァイオリン）によりコルンゴルド／ヴァイオリン協奏曲と、マーラー／交響曲第5番で追悼の意を示した団員の心のこもった公演となった。

愛知室内オーケストラ定期は、舘野泉（ピアノ）による色彩豊かなエスカンデ／左手のためのピアノ協奏曲を含んだシーズン最初（4月）は、山下一史によりベートーヴェン交響曲第1番、7番で幕を開けた。5月は、来年度続編があるという権代敦彦（コンポーザー・イン・レジデンス）／空の裂け目からの初演を含む。原田慶太楼（指揮）によるコリリアーノ／打楽器のための協奏曲の日本初演を含んだ7月公演、出口大地（指揮）によるショスタコーヴィッチに焦点を当てた9月公演、原田慶太楼による「洗練のきわみ」（10月）、「名匠ユベール・スダーンによる真髄を究めた解釈」（11月）を開催した。

その他、音楽クラコ座vol.13「ゆがむ共振・アナセンの視えるオンガク」（2月）、加藤訓子プロデュース『STEVE REICH PROJECT』（6月）、加藤訓子『バッハを弾く』（7月）、電子音楽による『ミッドジャパ音の芸術祭2025』（8月）、『くりもとようこ音の個展X / 弦・絃祭り』（10月）、『窪田健志打楽器リサイタルvol.6』（11月）、『奥村晃平（バリトン）・ブラームスの歌曲スペシャルリサイタル』（11月）など、愛知県と繋がる音楽家たちによる継続的な意義のある公演も多数開催された。

伊藤美由紀（いとう・みゆき）

コロンビア大学（ニューヨーク）で作曲をトリストラン・ミュライユに師事、博士号を取得。文化庁芸術家在外研修員としてIRCAMにて研鑽を積む。ニフェアールの代表として自主企画公演を定期的に展開し、第14回佐治敬三賞、名古屋市民芸術祭特別賞「クリエイティブ企画賞」を受賞。国内外で作品の発表を続け、千葉商科大学などで後進の指導にあっている。

http://www.miyuki-ito.com/Miyuki_Ito/Home.html

● 関西

門田 展弥

2025年は大阪・関西万博が開催されたこともあり、関西のクラシック界は何かと賑やかであった。ただ、半世紀以上も前に開催されたEXPO'70の際に巻き起こったあの現代音楽の旋風を知る者にとっては、些か物足りなくもあった。とはいえ、万博開催記念となった「大阪4オケ」では、大フィル、関西フィル、大響、日本センチュリーが、それぞれ、武満徹、萩森英明、外山雄三、久石譲の作品を演奏。思いがけず、日本音楽界がたどってきた50有余年の変遷を回顧する機会となった。

では、これより三つの視点に分けて話題をピックアップする。まず、オーケストラ。9月、大阪交響楽団が創立45周年記念第282回定期演奏会を開催。常任指揮者/山下一史の指揮によって、ヴェルディの『レクイエム』を演奏。同団は、1980年に大阪シンフォニカーとして産声を上げ、初代音楽監督・常任指揮者は小泉ひろしであった。2000年、本拠地を堺に移し、2010年、現在の名称となった。

大阪フィルハーモニー交響楽団は4月の第587回定期において、エルガーのオラトリオ『ゲロンティアスの夢』を上演。これまで、イギリス音楽の紹介に努めてきた音楽監督/尾高忠明が満を持してこの大作に臨んだ。エルガーはイギリスの国民的作曲家であり、イギリス人にとってはブリテンよりずっと身近な存在。ちなみに、このコンサートは「アフニス エンブレム」に選ばれている。9月、それとは対照的な、尾高&大フィルによる2度目の「ベートーヴェン・チクルス～原点にして頂点～(全5回)」がスタート。尾高の並々ならぬ意気込みが伝わってきた。

関西フィルハーモニー管弦楽団は、ホールでのコンサート以外に多くの学校巡回公演(芸術鑑賞会)を行っており、その活動は本拠を置く門真はもとより、兵庫県や滋賀県など大阪府外の小中学校にも及んでいる。日常、オーケストラの演奏を聴く機会のない子ども達にとって、貴重な体験となっているに違いない。たとえ、一生に一度であろうとも、その記憶は後年まで残るのではないだろうか。首席客演指揮者/鈴木優人が3年計画で始めた「ベートーヴェン・ヒストリー(全9回)」も興味深い。ピアノ協奏曲の演奏にフォルテピアノを用いるという試みには、少なからず驚かされた。往時の音色を再現しようというアイデアはもろん理解できるが、モダン楽器とのマッチングがどうなるか、最後まで見届ける必要がある。

3月21日、日本センチュリー交響楽団と首席指揮者/飯森範親による「ハイドン・マラソン」がとうとう完結した。10年の歳月と38回のコンサートによって、ハイドンの交響曲全104曲を演奏ならびに録音するという壮大極まりないプロジェクトであった。世界でも稀にみる、少々「向こうみず」な挑戦を完遂させた飯森と楽団員の集中力と持続力には、心より敬意を表する。

次はホール。京都コンサートホールが開館30周年を迎え、種々の記念コンサートを開催した。スイス・ロマン管弦楽団、MARTHA ARGERICH & SINFONIA VARSOVIA、内田光子ピアノ・リサイタル、ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団、京都市交響楽団「広上淳一×ローマ三部作」、或いはKyoto Music Caravan 2025等々、まこと多彩な内容であった。

兵庫県立芸術文化センターは開館20周年。こちらも、トーンキョウストラー管弦楽団やバーミンガム市交響楽団等が来演。同センターでは、開館から今日に至るまで、兵庫芸術文化センター管弦楽団をはじめとする主要公演の盛況が持続している。集客の難しいクラシック界において、ここだけは完全に別世界の感がある。

1973年に開館した神戸文化ホールは「開館50周年シリーズ」最後の年となった。3年に亘り、様々な催しが開かれたが、11月に行われた神戸市室内管弦楽団と神戸市混声合唱団による合同定期「ベートーヴェン・ダブルビル」は、そのフィナーレを飾るに相応しい空前のプロジェクトであった。それは、『ミサ・ソレムニス』と『第九』を2日連続で演奏するというもの。両曲には密接な繋がりがあり、ミサがまだ残っている耳で第九を聴く事によって、「ベートーヴェンの脳裡を追体験」してほしいという同室内管弦楽団音楽監督/鈴木秀美の熱い思いが込められていた。そして、もう一つ、4年に一度、神戸が世界に向け発信する「神戸国際フルートコンクール」が開催された。今回は第11回。E.パコをはじめ、多くの世界的奏者がここから巣立っていった事は、もう繰り返すに及ぶまい。1985年の第1回から実に40年、今や、その存在意義は不動のものとなっている。

中小のホールも、ユニークな企画で関西の底力を見せてくれた。その筆頭は、住友生命いずみホール。1月、「メンデルスゾーン 光のほうに」と題する4回のコンサートを開催。進境著しい山田和樹が、大阪4オケを指揮、メンデルス

ゾーンの全交響曲、ヴァイオリン協奏曲、オラトリオ『エリア』その他を演奏。わずか8日の間に、これだけの楽曲を演奏するとは、全く恐れ入った。2025年度主催公演メイン企画「バッハ2025綾なす調和（全6回）」も、ホールの特性を活かし、よく練られたもの。Vol.2に登場、オランダ・バッハ協会でコンサートマスター兼音楽監督を務めた佐藤俊介のヴァイオリンは、期待通り別格であった。

小規模ながら、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールも開館30周年を迎えた。記念公演「偉大なる3人のコンサートマスター（全3回）」は人気が沸騰。3人のコンマス、V.シュトイデ（ウィーン・フィル）、石田泰尚（神奈川フィル&京響）、郷古廉（N響）が、それぞれ個性豊かな演奏を披露した。一方、フェニックス・エヴォリューション・シリーズ112に登場したAKA DUOの松岡井菜（ヴァイオリン）と木口雄人（ピアノ）は、大いに将来が囑望される逸材であった。

最後はオペラ。関西歌劇団が、第105回定期公演においてヴォルフ＝フェッラーリの『イル・カンピエッロ』という珍しい作品を取り上げた。ヴェネツィアを舞台に、ヴェネツィア方言で歌われる美しいメロディーに彩られた作品。また、12月には「2025グランドオペラフェスティバル in Japan（倉敷市）」にて、マスネの『サンドリヨン』を上演。いずれも、オペラ指揮者の道をまっしぐらに歩む牧村邦彦がタクトをとった。

関西二期会は、レハールの喜歌劇『メリー・ウィドー』（第99回オペラ公演）を上演。演技にダンスに、ことのほか工夫を凝らした太田麻衣子の演出が光った。

びわ湖ホールプロデュースオペラは、コルンゴルトの『死の都』を上演。2014年、日本初となる同ホールでの舞台上演時に栗山昌良（2023年没）の行った演出が再現された。

兵庫県立芸術文化センターの「佐渡裕芸術監督プロデュースオペラ2025」は、ワーグナーの『さまよえるオランダ人』であった。20作目となる同プロデュースオペラにおいて、初めてワーグナー作品が舞台にのった。それにしても、7回公演という破格なスケジュールを楽々とやってのける集客力には、改めて驚嘆。じわじわとオペラ熱が広がっているように感じられた次第である。

門田展弥（もんだ・のぶや）

京都市立芸術大学にてオーボエを、大阪教育大学大学院にて作曲を学ぶ。1991年より1年間ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジに留学。月刊『音楽現代』、及び『関西音楽新聞』にコンサート批評等を寄稿。2023年、国際教育学会「館糾賞」を受賞。主要作品：オペラ『OTOHIME』（2015年、英国Hastings管弦楽版初演）、オペラ『業平』（2016年、京都初演）、バレエ『The Crane Wife』（2018年、英国Bexhill-on-Sea初演）、バレエ『安寿と厨子王』（2024年、大阪富田林初演）他

●中国

徳永 崇

概況。物価や人件費の上昇という困難に直面しながらも、各団体が様々に工夫し、健闘する姿がうかがえる。コンサート単体を見ると、集客についてはほぼコロナ禍以前、あるいはそれ以上の水準を回復するも、財団や自治体の経済状況により公演数の減少や、確実に収益を確保できる企画内容に向かう傾向が見られ、海外や国内主要団体の巡業の減少も目立つ。そのような中、福山のリーデンローズで昨年からはまった広島交響楽団と京都市交響楽団による定期公演が好調。被爆80周年の節目を迎え、広島を中心に多くの平和関連公演が行われた。

広島。広島交響楽団が被爆80周年特別定期演奏会を含む11回の定期演奏会を実施。音楽監督就任2年目となるアルミンクの采配か、ドヴォルザークやヤナーチェクの演目が複数回取り上げられたことに加え、細川俊夫《森のなかで》(10月第455回定期)や2024年逝去したリームの《厳肅な歌》(4月第450回定期)など新しい作品も。ガーシュウインの作品のみで構成された3月の第449回定期(指揮/pf: ウェイン・マーシャル)や、生誕100年となる芥川也寸志の作品のみで構成された7月の第453定期(指揮: 高関健)など、特集の仕方にもこだわりが見える。ヴァイオリンの庄司紗矢香を招いた11月の第456回定期も好評。6月の被爆80周年特別定期演奏会ではショスタコーヴィチのピアノ協奏曲第1番とチャイコフスキーの交響曲第5番が披露された(指揮: アンドリス・ポーガ, pf: 角野隼斗, trp: 児玉隼人)。

定期以外の広響公演としては、例年の「平和コンサート」(8月)に加え、アルグリッチを招聘した「被爆80周年 Music for Peace」公演など、平和関連の大きな企画が目立つ。また、テーマを深掘りする「ディスカバリー・シリーズ」が7月より「シン・ディスカバリー・シリーズ」と名称を変え、2025年は4回実施。モーツァルトを定点的に取り上げつつ、被爆80周年に絡んで嵯場富美子《広島レクイエム》(2月)、藤倉大のピアノ協奏曲第4番「Akiko's Piano」(7月)、大木正夫の交響曲第5番「ヒロシマ」(10月)など平和に関わる演目多数。名曲を聴かせる「音楽の花束」シリーズは3回実施され、前年に第2回ひろしま国際指揮者コンクールで優勝したシェン・イーウェンとピアノの上原彩子がチャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番を好演(5月)。12月の「第九ひろしま」は垣内悠希指揮。

オペラ分野では、ひろしまオペラ・音楽推進委員会による8月の《セヴィリアの理髪師》が前年度集客を上回る盛況。広島シティオペラが《こうもり》を2月に、広島オペラアンサンブルが《カルメン》を11月に。

吹奏楽分野では、広島ウインドオーケストラが6月の第63回定期演奏会に第1回ひろしま国際指揮者コンクール優勝の大井駿を招聘し、ガーシュウインの《ラブソディー・イン・ブルー》吹奏楽編曲版を弾き振りにて披露。また、平和定期演奏会シリーズを始動し、10月の第1回公演で保科洋のオペラ《はだしのゲン》セレクションなど演奏。

現代音楽分野では、上記の広響公演のほか、アンサンブル・アッカが広島文化賞受賞(2022年度)記念公演として第21回定期演奏会を開催し、吉松隆、久留智之、コスキネンらの作品を取り上げる。

福山。ふくやま芸術文化ホール(リーデンローズ)では、広島交響楽団及び京都市交響楽団による福山定期が2年目を迎え好調。この企画は、各公演を2日間連続で行い、そのうち1回は近隣の中学2年生を無料で招待するという教育的効果を狙ったもの。本年は広響が4回(2・3・6・9月)、京響が2回(4・10月)を実施。上記を含む様々な取り組みが評価され、本ホールは令和7年度地域創造大賞(総務大臣賞)を受賞。地元企業からの協賛を呼び込む芸術文化財団の豊田泰久理事長や作田忠司館長の取り組みは、衰退する我が国の文化事業を活性化させる上で多くの示唆を与える。例年の「ばらのまち福山国際音楽祭」(5月)では、ヴィニシウス・カッター(指揮)、ジェニファー・ラリー(sop)、南紫音(vn)、周防亮介(vn)らを招聘。

東広島。芸術文化ホール「くらら」では、ヴィータ◆ムジカ◆オペラが「アイダ」を5月に。ハーブのグザヴィエ・ドゥ・メストレが10月にリサイタル。11月の広響第6回東広島定期演奏会でショパンのピアノ協奏曲他(指揮: 広上淳一, pf: 中川優芽花)。12月の須川展也サクソ・リサイタルでは、後半で公募により集まった多くの一般参加者が共演し話題に。

呉。ベルリン交響楽団がモーツァルトのオーボエ協奏曲とシューマンのピアノ協奏曲他を6月に(指揮/ob: シェレンベルガー, pf: 石井琢磨)。7月の広響第35回呉定期演奏会でベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲他(指揮: 徳永二男, vn: 郷古廉)。

廿日市。4月の広響第28回廿日市定期演奏会でグリーグのピアノ協奏曲他（指揮：アルミンク，pf：江口玲）。6月に「はつかいち室内合奏団“SA・KU・RA”」がヴェルディの弦楽四重奏曲（弦楽合奏版）他（指揮・ヴァイオリン：長原幸太）。9月にヤブウォンスキのピアノリサイタル。

岡山。岡山フィルハーモニック管弦楽団のミュージックアドバイザーを務めた秋山和慶が1月に逝去。ニューイヤークンサートと4回の定期演奏会を実施する中，秋山が出演予定であった公演については指揮者の交代で対応。3月第83回定期でシベリウスのヴァイオリン協奏曲他（指揮：高関健，vn：竹澤恭子），5月の第84回定期でスメタナの連作交響詩他「我が祖国」（指揮：三ツ橋敬子）など。なお，7月からホームの岡山シンフォニーホールが改修工事のため，津山文化センターや倉敷市民会館等に分散して公演を実施。海外団体については，ベルリン交響楽団が呉公演と同内容で7月に。オペラ分野では，関西歌劇団がマスネ《サンドリヨン》を12月に。

島根。9月の広響第32回島根定期でチャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲他（指揮：飯森範親，vn：周防亮介，出雲市民会館）。開館20周年となるグラントワでは，ロシアやドイツから演奏家を招聘し「国際音楽交歓コンサート2025」を9月に。プラバホールでは，児玉隼人トランペット・リサイタルが7月に，神尾真由子&萩原麻未デュオ・リサイタルが9月に。

山口。周南市文化会館で5月にウィーン少年合唱団公演。宇部市渡辺翁記念会館で日フィルが10月に第18回UBEクラシックコンサート，反田恭平が11月にピアノリサイタル，12月にベルリンフィルの弦楽奏者たちと共演。山口市市民会館で12月に児玉隼人トランペット・リサイタル。

鳥取。7月に米子市公会堂で新日本フィルがシューマンのピアノ協奏曲他（指揮：川本貢司，ピアノ：石井琢磨。とりぎん文化会館でスイス・ロマンド管弦楽団がストラヴィンスキー《春の祭典》他（指揮：ジョナサン・ノット）。9月に米子文化ホールで「B→C山本耕平テノールリサイタル」の米子公演。

徳永 崇（とくなが・たかし）

作曲家。広島大学大学院人間社会科学研究科教授。広島大学大学院教育学研究科，東京藝術大学音楽学部別科作曲専修及び愛知県立芸術大学大学院音楽研究科博士後期課程修了。ISCM World Music Days入選（2002/香港，2014/ヴロツワフ）。武生作曲賞（2005）。作曲家グループ「クロノイ・プロトイ」メンバーとしてサントリー芸術財団第9回「佐治敬三賞」（2010）など。

● 四国

岸 啓子

瀬戸フィル（高松市）は3月に三ツ橋敬子指揮のもと上野耕平を迎えてアルトサックス協奏曲（逢坂裕作曲）を披露し（第42回定期）、9月には2度目の指揮となるA.ソリアーノをスペインから招いてギター協奏曲（ギター：ダビ・M・ガルシア）を含むスペイン音楽を情熱的に演奏した（第43回 フラメンコ：荻野リサ 9月）。編成と規模を自在に変え、地域の音楽家を巻き込みながら、「能楽とオーケストラ」（宇田津町）、「思い出の心のうた」（四国中央市）、会員コンサート等を実施し、高松名物となった丸亀商店街での「街クラシック」（11月）や、行政・教育機関と連携しての0才からのコンサート、学校巡回芸術・鑑賞教室も精力的にこなして圧倒的存在感を示した。

高松交響楽団もまた日常に溶け込む音楽活動と高度な芸術追及をシームレスに実現し、美術館コンサートやジュニアオーケストラ育成に尽力する傍ら、舞踏と音楽の多角的繋がりを軸に、定期演奏会ではハチャトリアンの『ガイーヌ』他を熱演し（132回指揮：小森康弘）、秋にはチャイコフスキー『くるみわり人形』全幕を島田バレエ団と上演した（指揮：山上純司）。また2020年から続く「高松ベートーヴェン記念祭」連続演奏会にも貢献してきた（企画・指揮：大山晃 7月）。第9源流の地であり第9を街のうたとも祭りともしてきた丸亀市では、第9演奏会が2つのイベントと共に例年通り実施された。

愛媛交響楽団は、2度の定期演奏会でフランスとスペイン音楽（第52回 指揮：大谷麻由美）、ドイツロマン派音楽を好演し（第53回 指揮：上野正博 pf：福富彩子12月）、福富のシューマンのピアノコンチェルトは、湧き立つ情熱、甘さと翳りを湛えた抒情性、詩的なピアノリズムで聴衆を魅了した。徳島交響楽団は、フランス音楽によるニューイヤークンサート（指揮：中田延亮 チェロ：伊藤悠貴 2月）とチェコ音楽による定期（第54回 指揮：石毛保彦 9月）を実施し、高知交響楽団は、大曲を並べる従来方式から離れ、芥川也寸志等多様な作曲家の親しみやすい名曲による演奏会を行った（第174回指揮：平川範幸 vl：山本志奈 香南市、第175回指揮：大市泰範 高知市）。四国フィルも健在である（指揮：澤和樹 雲の上のコンサート）。人口3万人の高知県四万十市で30年の歴史を刻んできた四万十国際音楽祭は残念なことに昨年終了したが、中村交響楽団は今後も活動予定である。

3年連続してオペラ公演を実現させたオペラ徳島は、『イル・トロヴァトーレ』（第22回12月）で大成功を収め（指揮：三原寛志 演出：奥村啓吾 マンリーコ（トロヴァトーレ）：樋口達哉他）、さわかみオペラも地元のコーロ・インダコと『ラ・ボエーム』を熱演した（12月）。

四国二期会（香川）は過去に演じたオペラの名場面を取り上げて実力を示し（第50回記念ガラ・コンサート 指揮：松下恭介 演出：中村敬一 丸亀シティフィル 9月）、徳島支部はオペラ・ガラコンサートを、愛媛支部は「歌曲とオペラ～珠玉の名曲の花束～」（第41回11月）を、高知支部は「歌い継ぎたい心の歌」（小林他）を公演した。香川ではオペラ『扇の的』小編成ダイジェスト版の再演があり（四国村農村歌舞伎舞台 指揮：大山晃 10月 瀬戸内海国際芸術祭）、しこちゅーオペラ（四国中央市）はコンサートを実施した。オペラ・えひめはプッチーニの名曲によるコンサートを開催した（第16回定期 指揮：金正奉）。また音楽物語『一寸法師』（松山市）など小さいながらきらりと光るイベントも散見された。

高知バッハカンタータフェラインはバッハの宗教カンタータを演奏し（第28回定期 主宰・指揮：小原浄二）、コレギウム・ムジクム高松はロマン派のバッハ解釈にも踏み込み、実力ある歌手を揃えてコンサートを展開した（第29回指揮：大山晃 tn：若井ほか）。第8回高松国際古楽祭（音楽監督：柴田俊幸）は直島と高松市を拠点にチェロ独奏会や和楽器を交えたガラ・コンサートで盛り上がった。

岸 啓子（きし・けいこ）

東京芸術大学音楽学部大学院音楽研究科（音楽学）修士課程修了

愛媛大学教育学部音楽科に教員として40年勤務

愛媛大学名誉教授

著書 はじめての音楽史（音楽之友社 分担執筆）他

●九州

高坂 葉月

年間130回以上の演奏会を行う九州交響楽団は、アクロス福岡やFFGホール等での自主公演に加え、九州各地への巡業やオペラやバレエの演奏、青少年向けのコンサート、ポピュラーコンサートなど、多様な場で活動をしている。通年にわたり音楽を届けるこの存在は、九州の文化的インフラといえるだろう。一方で、新型コロナ以降、客足が完全には戻らないという。聴衆の高齢化や人件費・移動費の高騰も重なり、常設オーケストラを取り巻く財政状況は依然として厳しい。

楽団の演奏の質は着実に向上している。小泉和裕前監督のもとで磨かれたアンサンブルに、技術力の高い若手奏者が加わり、音楽的な厚みが増した。第432回定期では、3年連続で客演したユベール・スダーンのもと、ブルックナー《交響曲第3番》では増強された金管群の厚い響きがまっすぐに客席に届き、《テ・デウム》では壮大でドラマティックな構築力が光る。プログラムは「戦後80年に寄せて」と題され、最後を《アヴェ・ヴェルム・コルプス》で閉じることで、高らかな祈りから内省へと聴衆を導き、深い余韻を残した。2024年に首席指揮者に就任した太田弦の得意とするイギリス作品も近年頻繁に取り上げられている。第433回定期では、ブリテン《ピーター・グライムズ》から「四つの海の間奏曲」と、楽団初演となる《テノール、ホルンと弦楽のためのセレナード》を披露。繊細かつドラマティックな演奏で、ホルンの福川伸陽がナチュラル・ホルンを思わせる柔らかな音色で空間に奥行きを与え、鈴木准の伸びやかな声がそれに呼応した。

定期演奏会前には音楽学者が聞きどころを解説し、団員が小品を演奏する「目からウロコの九響アカデミー」も毎回開かれており、ファンと奏者との親密なコミュニケーションの場となっている。さらに九響が近年特に力を入れているのがインクルーシブな演奏会である。2022年から続く「九響マタニティコンサート」は、クラシック音楽がこれから親になる人の不安を癒し、途中退席なども許容する設えが安心をもたらすのだろう。さらに今シーズンから始まった「夏休みリラックスコンサート」も同様に、年齢や障がいの有無にかかわらず安心して音楽を楽しめる場として重宝された。

また、ホワイトハンドコーラスNIPPONとの協働による「みえる かんじる あたらしい第九」も印象に残る。様々な

配慮が施された会場で、舞台上の合唱のみならず聴衆も白い手袋を着け、手話によって歌詞を表現しながら演奏に参加する。定期では見ない家族連れも多く、老若男女それぞれが手袋をはめて嬉しそうに表現していた。こうした試みも、オーケストラを地域に浸透させるきっかけになっている。新年度からは経営強化のため金融の専門家を迎え、平日昼公演など新たな試みも計画されている。新たな聴衆層の獲得に至り、活況につながることを期待したい。

通年活動を担う九響に対し、九州各地で続けられてきた音楽祭は、年に一度の凝縮された文化的機会として重要な役割を果たす。ゆふいん音楽祭は今年で50回、霧島国際音楽祭は46回、宮崎国際音楽祭は30回、別府アルゲリッチ音楽祭は25回を迎えた。これらの音楽祭は特別な催しというより、土地の一年のリズムの中に組み込まれた文化的な年中行事として機能している。戦後80年を迎えた今年の別府アルゲリッチ音楽祭では、「過去を学び 現在を生き 未来を描く」をテーマに掲げ、第一次大戦を経験したラヴェルの作品などがプログラムに組み込まれた。世界の出来事に対する強い意識を背景に、クラシック音楽と社会との接点を時代に即して問い直そうという姿勢が、この音楽祭では買われている。

宮崎国際音楽祭では、前身である宮崎国際室内楽音楽祭の時代から総合プロデューサーとして関わり、音楽祭を牽引してきた徳永二男に県民栄誉賞が贈られ、その受賞記念リサイタルも開催された。3日で席が埋まるほどの盛況ぶり、彼が地域からいかに信頼と期待を寄せられてきたかがうかがえる。紆余曲折を経ながらも回を重ねることで、奏者と地域の関係は深化し、聴衆もまた育っていくのである。

音楽祭に限らず、通年型のシリーズも各地で育っている。柳川市民文化会館「水都やながわ」白秋ホールでは、アーティスティック・ディレクターのイグナツ・リシェツキが明確なテーマ性を打ち出し、毎年8月にコンサートを企画。2023年から東欧、ウィーン、アメリカといった切り口でプログラムを構成し、地域に定着しつつある。

また、プロセスを共有する実践として、大分のiichiko総合文化センターの音の泉ホールで2023年から継続されている「おんがくのアーティスト・イン・レジデンス」が挙げられる。大分出身の奏者が集い、音楽を作り上げていくプロセスそのものを公開する。年に一度集い、音を重ねてい

く時間は奏者たちにとってもお互いの一年の様子を窺い知る、楽しみな機会になっているという。完成された演奏を聴く場から、音楽が育つ時間に立ち会う場へと、聴衆の関わり方も変化している。

そして、思想と日常を接続する表現として継続されているのが、河合拓始の「自然真栄楽」のシリーズである。5年目を迎え、年々人気を高めている。オーボエ・トロンボーン・ピアノ・鍵盤ハーモニカ・打楽器を基盤に、今年は歌やダンス、体術などが加わり、表現の幅がさらに広がった。九州の民謡が、土着的なリズムと洗練された和声感覚のハイブリッドによって、独特な世界を形作っていく。観客自らが効果音によって参加したり、盆踊りの輪に加わったり。予測不可能な展開が起こりながらも、その場に柔軟な共同体が立ち上がるような時間だった。

九州の音楽文化においては、参加や共有へとひらかれる方向と同時に、緊張と集中を極限まで高める表現も重要な位置を占める。その例として「エッセンシャル・ワークス」の演奏会を挙げたい。指揮者の浦部雪が率いる気鋭のアンサンブルが、シェーンベルク《月に憑かれたピエロ》やグリゼー《時の渦》といった20世紀の難曲を披露。これらは、生の音楽として体感する機会が少ない作品だ。なかでも《渦》での突破的な響きは会場を貫いた。四分音下げて調律されたピアノの攻めの演奏によって、時空の歪みを聴くような感覚に陥った。尖鋭的な表現に触れる機会が少ない九州において、この演奏は、聴衆に鮮烈な記憶を刻み込んだように思う。

広い九州の音楽シーンの中で、今回触れられなかったものも多い。しかし取り上げた実践に共通するのは、演奏会をどのような時間として立ち上げるのか、誰とどのように音楽が生じる場を共有するのかという問いが、明確に意識されている点だろう。日常に寄り添い、ともに過ごす場をひらく試みがある一方で、緊張と集中のなかでしか立ち現れない音の経験もまた求められている。その両極を保ちつつ、地域に寄り添う音楽を味わう機会が多く存在しているのが九州の音楽シーンの魅力だといえる。

高坂葉月（こうさか・はづき）

群馬県出身。東京藝術大学音楽学部楽理科卒業、同大学院修了。在学中、オーストリア政府奨学生としてグラーツ芸術大学およびインスブルック大学に留学。音楽学博士（東京藝術大学）。2015年～18年、九州大学大学院芸術工学研究院ソーシャルアートラボの学術研究員として、複数のアートプロジェクトの企画運営に関わる。西日本新聞や雑誌『音楽の友』にて批評活動も継続的に行っている。平成音楽大学非常勤講師。

●沖縄

上地 隆裕

本県洋楽部門で特に注目を集めたのは声楽界である。中でも出色の出来栄えと言えたのは、実在する歴史物語を「県産オペラ」と銘打ち、県内外、ひいては全世界に発信しようという狙いで行われた「アオリヤエ」（琉球国王妃の名前）の連続公演であった。具体的に数字面で表すと、公演数18回、動員数の合計11,600人、公演地＝浦添市の「てだこHALL」のみ、役付出演者（主役は第七代琉球国王＝尚寧王＝を演じた田里直樹と、アオリヤエ姫役の宮城美幸）のギャランティは、地方都市では考えられぬほどの予算規模で上演を成功させている。

上述の公演に次いで注目されたのは、金井喜久子シンポジウムであった。金井は、本県（というより沖縄本島）から約3百キロ南方に位置する宮古島出身（1906年生れ）の作曲家である。東京音楽学校（現・東京藝大）の作曲科を卒業し、邦人女性作曲家初の交響曲（第一番）を初め、オペラや室内楽、舞台音楽（宝塚歌劇団公演）等、数多くの作品を世に送った人物である。年末（12月13日）に行われた同シンポジウムは、ミニコンサートを始め、所蔵資料、教育環境、作曲理論、作品分析、作品受容等の幅広い視点から彼女の生き様と国際的需要度（特にプロのヴァイオリニストによる英国に於ける金井作品の受容状況の実例報告は興味深いものであった）等、その功績を般化させる意味からも意義深い取り組みであった。

筆者も金井と同じ宮古島出身なので、かなり以前から彼女の実績については注目し、多少なりともその広報支援活動（例えば、ある音響設備の整ったサロンを会場にして、既出の田里直樹（テノール歌手）氏を定期的に起用し、聴衆を容れて彼女の作曲またはアレンジしたほぼ大半の歌曲を全てLiveでCDに録音、近在の学校に寄贈するなどした。

しかし、沖縄は特に民謡の隆盛地であり、そんな環境で「西洋音楽を般化させること」は並大抵ではない。常時そのような否定的状況と戦いながら、これからも西洋音楽という、演奏芸術を般化させていく覚悟が必須だ。

最後に、県内外の実演家による注目すべき公演を幾つか挙げておきたい。まずオーケストラから始めると、琉球交響楽団（RSO）は、音楽監督大友直人のリードで、定期その他のプロジェクトを完遂した。筆者が特に感銘を受けたのは、9月14日に行われた第52回目の定期公演で、最近は珍しいオール・チャイコフスキー・プログラム（ピアノ協

奏曲第1番＝独奏は福間洸太郎、悲愴交響曲）だった。

冷戦時代の沖縄では、ロシアや東独の楽団が何度もやって来て、定食のように演奏を繰り返していたプログラム・メニューである。大友のバトンは手慣れたプログラムを自在に振っているようで、そのタイトルとは異なって筆者には楽しく感じられた。

その他の大小のアンサンブルは、着実に定期公演シリーズをこなしており、中でもユース・オーケストラの取り組みの中にはジャズに挑戦するなどのユニークな団体もあった。

ソロの部門では、飛び抜けた企画や人材が見当たらず、例年になく低調と言えた。実績のある面々は別として、新しいパワーの持ち主が見当たらなかったのは残念である。

最後に、ユニークと言えばユニークな活動団体を紹介しよう。それは、今年で結成20年目を迎えた団員約30人余の「指笛王国おきなわ」と称する演奏団体である。演奏楽器は全員共通、手の指だけだ。既に定期演奏会も通算18回目を数え、出張公演、マスコミ出演の回数は数知れず、というパワフルな演奏団体だ。

他の演奏家グループと大きく異なるのは、団長が国王と呼ばれ、なんと王冠をかぶり、おまけに国王専用の衣装を身にまとっているところ。団員のユニフォームは、燕尾服ではなく、黄色のポロシャツ。沖縄を訪れる際は、是非同団（国）の定期公演または練習風景をご覧あれ、と申し上げておきたい。

上地隆裕（うえち・たかひろ）

沖縄県在住、1948年沖縄県宮古島市（旧城辺町）生まれ。琉球大学法文学部卒業後最初の渡米。通算五年の滞米生活を経験。最終学歴はメリーランド州立大学教育学部大学院修士課程（専攻は心理学・カウンセリング）修了。

帰国後、沖縄県人材育成財団の派遣により、ニューヨーク大学にて一年間研修。学業の傍ら、全米・全世界の各地の演奏団体、音楽院の取材を続ける一方、数百名の独奏家、指揮者らと対談、それらの内容を在京の月刊誌、その他の刊行物で発表した。

主な著書：「世界のオーケストラ」（四部作）（芸術現代社・刊）ほか多数